

『後撰集新抄』翻刻（二）

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (I)—————

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only nine or ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vol. 64 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume. For this issue I have transcribed volumes I and II.

中山美石著『後撰集新抄』は全二十巻『別記』一卷から成ったようだが、現存版本は「春上」から「恋六」までの十四巻と、『別記』一卷の十五冊のみである。刊行は文化十一年(二八一四)である。明治四十三年(一九一〇)から大正元年(一九一三)にかけて歌書刊行会から全巻が翻刻されたが、巻十七、十八(「雑」三、四)は欠落しており、『別記』は除かれている。巻十七、十八が欠落しているのは、翻刻に寄せた佐佐木信綱の序文(新刻後撰集新抄のはじめに)によれば、稿本が早く散佚してしまったためらしく思われる。

ところで、『後撰集新抄』が後撰集の注釈書としてすぐれた出来栄であることは処々にいわれるが、版本の揃いも国書総目録や国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録に見る限りでは決して多いとは思われず(たとえば目録類で確認できたところでは十五冊揃いの版本の在所は静嘉堂、書陵部、神宮、内閣文庫、早大、東大、東北大、刈谷、県立秋田図書館、石川県中央図書館など)、また歌書刊行会の翻刻もすでに稀観本となっていたやすく見ることはできない。国書総目録にも記載されていないのだが、たまたま聖心女子大学図書館の武島羽衣寄贈の武島文庫に版本の揃いがあることがわかり、先にその報告をかねて『別記』のみを翻刻した(『聖心女子大学論叢』六十四集、昭和五十九年二月)。引続いて本論部分を翻刻してゆく予定で、今回は巻一、二(「春上、中」)を翻刻する。

『新抄』の注釈は全歌に通釈を施すとともに語釈、有職の説明、鑑賞等にわたり、きわめて懇切に歌意を説き明かそうとする。それは後撰集聞書註、後撰集正義、八代集抄、後撰集標註などのいずれにくらべても、『新抄』の大きな特色といえる。師の本居大平は『新抄』の序文において、美石が「よろつまめ人」であり、その人柄にふさわしく注釈も「わきまへかたきふしふしは三度四度考へかへ」す、「まめ／＼しき心さし」によって書かれているといい、「手も足も及ひかたき歌とも」にも自説をさちんと示した功績などを讃めているが、それは単に師が弟子の著作に寄せた儀礼的な文飾ではなく、『新抄』の注釈態度の基本的な性格に言及したものと思われる。そうした几帳面な注釈

書として今日活用に耐えると思ふし、十分に翻刻の意味があると信ずる。

翻刻は聖心女子大学図書館蔵『後撰集新抄』十四冊、同『別記』一冊の版本を底本としたが、他に次のような数本を参看した。(1)和歌山大学紀州藩文庫本(四季部八冊、『別記』一冊の九冊本。四季部のみ八冊本。)、(2)神宮文庫本(春上・中・下)のみの三冊本。四季部のみ八冊本。これは美石の奉納本。『別記』を除く十四冊揃い本。)、(3)刈谷図書館本(十五冊揃い)、(4)静嘉堂文庫本(十五冊揃い)である。(1)~(3)は国文学研究資料館の紙焼およびマイクロフィルムで、(4)は静嘉堂文庫のマイクロフィルムによつた。それらは相互に奥付の記載に若干の異同がある(たとえば書肆名や、『新抄』の冊数表記が「全十冊、別記二冊」となっていたりする)が、その他は巻末広告の有無や多寡といった違いだけで、本文には異同はないと判断される。

なお翻刻を快諾して下さつた聖心女子大学図書館当局に感謝申しあげるとともに、レファレンスでお世話になつた吉田久治さんにもお礼を申したい。

凡例

- 一 底本は聖心女子大学図書館蔵『後撰集新抄』(全十四冊、『別記』一冊)、文化十一年版本である。
- 一 旧字体、略体、異体の漢字は当用漢字または通用の字体に改めた場合がある。譯↓訳、哥↓歌、畧↓略など。
- 一 仮名遣い、送り仮名、濁点はすべて底本のままである。
- 一 底本では句読点はすべて・であるが、適宜、や。に改めた。また若干私に削除したり施したりしたところがある。注釈書という性質上、読みやすく考えたためである。特に本居大平の序文には句読点は一切ないが、最少必要限度の範囲で私に付した。
- 一 底本の傍線——は——に直した。傍線は大抵右に付けてあるが、たまに左に付けることもある。それは底本のままである。その他引用歌の冒頭に付される「」は、普通の「」に直した。傍線の、や。を付すのは底本のままである。

- 一 底本の割書き部分の振り仮名は当該漢字の下に()して記した。
- 一 底本では、欄外に宣長の後撰集詞のつかね緒を引用したり、美石の注記を掲げたりしているが、それらは当該箇所適當な所に※を付して、一字下げて記した。割書きの形式であるのは底本のままである。
- 一 底本の頁数は表裏を区別しないので、本文の右傍に(一オ) (一ウ)のように記した。但、割書き部分で頁が変る時は傍書できないので、割書き本文の中にくり入れて(二オ)というように記した。

後撰集新抄 序 総論 一 (外題)
凡例 卷上

後撰集新抄序

後撰集はいにしへのみさかりなりし代の歌ともにて、歌まなひの道にとりてよく明らめずてはえあるましき集になん有ける。そは歌学ひの道には古の雅ひを心にならほししらはえあらぬわざなればなり。古のみやひをしらてはそのよみいつる心も詞もおのつからいやしく浅はかに聞ゆめれば、此道に入たむむ人はまつよく思ふ(二オ)へきことにこそ。かくてこの集をあげつらふに古今集は大かた歌にくつましらすえりととのへられて萬たらひたるを、此集はそれかうらうへにて四つの時恋雑なとわけたるにも思ひの外なるかたかひにいりみたれなど、すへていとく大らかなるえらみにてそのかみ家々の集にまれ何にまれ、見るにしたかひきくにしたかひ、とりあつめてその歌のよきあしきをもいはず、たゝあつめにあつめられたる物と見ゆるか、物学ひのかたにとりてはこれもいとうれしきさいはひになむありける。そはかの万葉集の歌とも古の真心をしるたよりとなれるとおなし定めになんありける。古今はたとへは人の家居の南表のかたにてよろつうるはしくみたりなることましらぬかことく、此しふは北のかたのうちくのうちとけ心

安くいひかはす言の葉の如く、おかしきこと(二七)も思ふまゝにあらはにいへるさまにて、その世のみや
 ひ心をさたかにこゝろうへきは此集になん有ける。しかはあれとも大かたそのをりふしの事にふれてよみいてたる歌
 にて、後の人のきゝわき思ひしるへからむためにとは思はぬともなれば、今の世の人のよめるやうにひかことこそま
 しらね、本末うちあはぬもあり。又よみふくめたる下の心はへもよそへていへるたとへの詞(二七)なともむげにわきまへか
 たき事のみ多かるに、これか註釈とては為家の大納言の抄と季吟法印の八代集の抄とさては契沖あさりのいさゝかつ
 書くはへたるとのみにて、いづれもねんころにときざとしたる物にはあらずて一わたりの事のみこそあれ、いささ
 かも耳遠くめなれぬふしなどはかへりていかにともいへることなくみなもらして、此学ひにこゝろいれてさるふし
 へあきらめおかむとこゝろさず(三三)人々も木の葉かくれの谷の細道いとわけなやみ、ましてうひ学ひのほとはけはしき
 坂路の岩かとゝのほりわつらひとゝこほりかちに、おのつから物うくして思ひなからうときものに見すくすもあめ
 り。さるはあたらみやひことなる物をや。こゝにおのかをしへ子中山美石は三河の国吉田ノ殿に仕へてよろつまめ人
 なるか、さいつころその君よりかしこき仰ことをうち(三三)なからうけ給はりて、これか註さくをなん物するとて事し
 けき仕わざのいとまへ(三三)によみ考へたる、もとよりなみへならぬさえのほとしられてたよはしくうきたることま
 しらぬときことともにて、けにかうも思ひよるへかりけりとかひありておほゆるもおほかるに、猶これかれましたしき
 友たちにもかたらひこゝろみておのかもとへもすぎへに見せてとかくあけつらひつゝ、中(四七)にかのわきまへかたきふ
 しへは三度四度考へかへしなといみしう心をくたきて物せられけるは、いとまめへしき心さしになん。さるはか
 のむつかしきつたかへての下道霧ふかき峰つたひのまとはしき所々もおふなへふみならして、みやま木のありとも
 しらすゆきすくしたる歌もかくこそ花も咲てはあれと、心とまるはかりいとよくときをしへ、いとことさまなるつゝ(四七)
 けからのひかことかあやしとうちかたふかれしも、今思へはかへりて枝さしおもしろき木たちのさまにてその世のし

わさの心にくゝおしはかられておかしきもあり。又こなたかなた道なき山川のはるかなる岩岸などに花か何そといふらむやうに手も足も及ひかたき歌ともゝ猶すくなからねと、しかあけつらひきたためたるもひとつの功なればかくまて物したるいさをのほとを思ふに、このまゝにてあらむはいとほいなきこゝちして世の歌人にとくしめさまほしく早く板にゑらせてしかたとそおもひよらるゝかし。此所々にも引いてたる詞のつかねをといふふみはわか鈴ノ屋の翁この集の事にこゝろかけて、まづ詞書の本末むすはゝれたるふしゝをたにかつゝとををしへはやとて物せられけるを、今かくねむころなる註釈のいてきたるを翁世にあらはうれしくかひありとこそめてられめ。かくてつひにすり巻になりていにしへ人のみやひ心も此ときさとしたるまめ心も世にひろくひろまりゆかは、此事おもほしおこしての給ひつけゝる君のめくみもいかゝはかしこく世にたふとみ思はさるへき。此とりゝなるめてたさを教ならぬ大平か心一つにおしこめかたくて思ひつらねたる、これやかて此ふみのはしかぎともならは又よろこはしからしやは

文化九年壬申春

本居大平

後撰和歌集新抄

惣論

村上天皇の御時、梨壺の五人に詔して、万葉集をよみとかしめ給ふついでに、これをえらばしめ給ひ、一条撰政公撰、其ころはいまだ藏人ノ少将にて、和歌所の別当をつとめ給ひ、古今の後にせんずとて、後撰集と名づけさせ給へるよし、されどもいかなるゆゑにか、正しくえらびあへずしてやめられたるによりて、しどけなきことどもゝまじれるよし、歌は古き姿にて、よき歌も多く、はたみだりがはしきもまじれるは、古今の撰より、榮花物語には、廿余年、古来風林抄に、延喜五年より、四十は、四十余年と見えたり、天曆五年は、いづくほどもなかりしかば、よき歌得がたく、すがたをばえらばれずして、心をさきとせられたればなり

などいふこと、榮花物語、袋草紙などをはじめ、かた／＼に見えたるをば、みな引出て下に記せり。正しくえらびあへられざりしものと見えて、四季恋雜などわけられたるさまは、古今集とひとしけれど、恋雜などの歌と見ゆるが、四季のうちに入たるなどもをり／＼ありて、歌の次序ソツヂもいとみだりがはしく、よみ人の名のしるしさまも、いかにぞや見ゆる所々もあり。或は、よみ人の名を誤たる所もあり。それにあはせて、詞書にもいとみだりがはしく、或は、いたくことたらで、詞書を以て、歌の意をもとめむとするに、其こゝろ得がたく、又は、深きゆゑよしありてよみ出つらんと見ゆるが、題しらずなど有て、さらにわきまふべきよしなきもあり。おふけなきいひごとながら、歌の意も、むげにをさなげに、つたなきさまなるなども、まれ／＼にはまじれり。されど中には、後世にうつし誤たること(二七)などもあるべけれど、かにもかくにも、他の撰集にくらべては、いと／＼みだりがはしきこと多かる集になむありける。しかはあれど、すべてをいはゞ、みさかりなる世の風雅フヤビにて、くだりての世のわざなどの、かけても及ぶべきにはあらず。めでたしとめでたく、いはんかたなく見ゆる事どもいと多かり。そはまづ、大かたは、其をりその事にふれて、たゞにはえあらぬあまりに、いにしへのさるみやび心より、いつはりかざりことよげにいひなす事などはなく、心におもへるすぢを、ありのまゝにいひ出られたる歌どもにしあれば、今の世にては、人情ニンジョウの眞を論ふべき法ホウとすべきもいと多く、これらのことは、其歌の所々に委くいへり。詞がらなどの、をさ／＼耳なれぬさまなるなどもまじれど、それはた、このみてしかよまれたるにはあらず。えんにもをしくも、(二八)たゞ意詞のよりくるまゝにものせられたるにしあれば、とあるもかゝるもいとめでたくなんありける。さるゆゑに、今及ばぬ心にも、こゝろをかたぶけて、つら／＼あぢはひみれば、そのよみ出られたらんをりのこゝちおしはかられて、ひとりゑみもせられ、涙もさしぐまるゝぞかし。これ此集のえらびのいと／＼大らかにて、貝や玉やとまじらへるさまなるがゆゑに、をかしき事も、あはれなるふしも、思ふまゝにあらはにいへる歌多かればなり。これぞ師の序にもいはれたる、其世のみやびをさだかに心得べきたねにて、今と

なりては、かへりていとうれしきさいはひなりける。ことに此集は、あだし集どもよりは、詞書ある歌いと多きを、さいいへど、さるみさかりなる世の手ぶりにしあれば、いとこまやかなるうちとけ言をも、大らかにうるはしくか(三二)きとりて、さて深き心ばへをふくみたるなどは、中々古今集よりも数多くなむ見ゆめる。それにあはせて、歌も、うち聞たる所は、たゞいと大らかに、或は本すあうちあはぬさまに聞ゆるなどにも、よみふくめられたる下の意は、いともくふかきたくみありて、よく心をいれてあちはひ見ば、いよくこまやかなる意も、うかどひしらるべく見ゆるもあり。すべて此集の風雅(イヤビ)は、かの源氏ノ物語の文章の、深き心用ひと、もはら同じさまなりと、師翁もいはれたり。さていにしへ人の風雅のおもふきをしるは、歌まなびのためはいふに及ばず、古の道を明らめしる学問にも、いみじくたすけとなるわざなりかし。すべて人は、雅(イヤビ)のおもぶきをしらでは有べからず。これをしらざるは、物のあはれを知らず、心なき人なり。かくて、其みやびの趣をしることは、歌をよみ、物語書(三オ)などをよく見るにあり。然して古へ人のみやびたる情をしり、すべていにしへの雅たる世のありさまをしるは、これ古の道をしるべき階梯なりなど、鈴屋ノ翁もいはれたり。かゝればかくめでたきふみの今の世に伝はれるは、かへすくもいとうれしきさいはひならずや。されば古のみやびに心ざしあらん人は、なほざりに見過すべきにはあらずなん。かくて此集のことの、古き書にみえたるは、

○栄花物語、月宴ノ巻云、むかし高野の女帝の御代、天平勝宝五年には、左大臣橋ノ諸兄、諸卿大夫等あつまりて、万葉集をえらばせ給ひ、醍醐の先帝の御時は、古今集廿卷えりととのへさせ給ひ、よにめてたくせさせ給ふ。たゞ今まで、廿余年なり。いにしへの今の、ふるきあたらしき歌えりととのへさせ給ひて、世にめでたうせさせ給ふ(三ウ)。此御時には、其古今にいらぬ歌を、昔のも今のもせさせ給ひ、のちにせんずとて、後撰集といふ名をつけさせ給ひて、又廿卷せんぜさせ給へるぞかし。それにも、此小野ノ宮のおとこの御歌、多くいらためれ。たゞし古今には、賈

之序いとおかしうつくりてつかうまつれり。ごせんしふにも、さやうにやとおぼしめしけれど、かれは其時の貫之、このかたのじやうずにて、いにしへをひき今を思ひ、ゆくすゑをかねて、おもしろくつくりたるに、いまはさやうの事にたへたる人なくて、くちをしくおぼしめしけり云々。

○袋草紙云、天曆五年、十月日、詔三坂上、望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔等（為イ）、於三昭陽舎（為イ）、令（為イ）讀（為イ）解（為イ）万葉集之次、令（為イ）撰（為イ）之（為イ）、号三製書、五人一也。一条撰政、為（為イ）藏人少将之時、力（為イ）此所之別当（為イ）、有奉行、于レ時有（為イ）三平兼盛、而不（為イ）入（為イ）此中（為イ）、不審云々。此集未定（四オ）テ止（四オ）レ之云々。仍（四オ）本無（四オ）三度計（四オ）。但（四オ）證本ハ、朱雀院塗籠本、又青表紙云々、是ハ類云々、水本也。とて、作者の誤れる論など、これかれ見えたり。

○後拾遺集ノ序云、村上のかしこき御代には、又古今和歌集に入らざる歌、はた巻を撰出て、後撰集と名づく。又花山の法皇は、さきの二の集にいらざる歌をとりひろひて、拾遺集と名づけ給へり。かの四の集万葉より、拾遺まは、ことでをいふなり。は、ことのはゝぬひものゝごとく、心は海よりもふかし云々。

○為家卿ノ抄云、凡古今拾遺は、歌どもかいそろひたる集、後撰集はよき歌のよき、わろき歌のわろさ、たのみがたき集なりと、先人は申されし云々。

○此集の證本といふもの、袋草紙に見えたるは、後世には伝はらぬなるべし。（四ウ）定家ノ卿の奥書に、天曆五年、十月晦日、於三昭陽舎ニ撰（レ）之（ウ）。為（ウ）藏人左近少将藤原伊尹別当。寄人、讃岐大掾大中臣能宣、河内掾清原元輔、学生源順、近江少掾紀時文、御書所、預坂上望城等也。謂（レ）之（ウ）梨壺五人。又云、貞応二年九月二日辛巳、為（レ）後代之證本、一重書寫所傳之家本、一悉用所父庭訓、為傳（レ）嫡孫也。同三日、令（レ）三説合候（レ）畢。書（レ）入（レ）落字（レ）畢。戸部尚書藤原。又此集、故者公卿皆書、三朝臣字（レ）、古今此枇杷、鉢也。枇杷、左大臣ノ歌、恋ノ部（レ）與（レ）伊勢（レ）贈答、書（レ）三葉平ノ名。如（レ）此事、後代人、或推而直（レ）之（ウ）。是非（レ）書寫ノ誤（レ）、此集ノ本説也。不（レ）可（レ）直（レ）改（レ）。作者ノ名字等、家々之本、多相

替^レ。皆随^フ三所^ノ受之說^ニ書^レ之^ヲ。同歌入^ニ兩部^ニ。古今ノ歌加入。如^キ此ノ事只随^フ本^ニ云々。又、天福二年三月二日、重^テ以^テ家本^ヲ終^ニ書功^ヲ畢。桑門明静と書給へる本、又、行成大納言自筆の本にて校合して、天福二年四月六日校^シ也と、かきそへ給へる本もあるよしなれども、いづれも写本にて、^(五オ)たやすく得がたく、今見及ばざるは、季吟法印の八代集抄に引おかれたるなどによりてしるせり。さて此奥書にも見えたるおもふきにては、よみ人の名のたがへる、同じ歌の二所に出たるなどやうの、いさゝかの誤は、古き事と見ゆれば、今改むべきにはあらず。さりとなはあるべきにもあらねば、其所々に委く論へり。猶此集の事、八雲御抄、古来風躰抄、長明法師の無名抄など、其他これかれの書に見えたるも、ことなることなきは、今はしるさず。さて栄花物語に、此集の序なきゆゑをいへるを、季吟法印のいぶかりて、此御時にも、源ノ順など有て、野宮の歌合の判詞、当座にいみじくかきたりし事などあれど、なほ貫之には及ぶまじくおほしめしたるにや、又、此集未定にてこれを止^ムと、袋草紙にも侍れば、序をか^ムしめ給ふまでにも及ばざるにや、^(五ウ)はかりがたき事なるべしといはれたるは、さることなり。げに順ノ朝臣は名高き人にて、八雲にも、順又稽古のものなりとのたまはせしばかりなれば、此序か^ムしめ給はんに、あかぬことはあるまじく思はるれば、序か^ムしめ給ふまでには及ばざりしなるべし。

○歌の数は、八雲御抄には、千四百二十首と見え、袋草紙には、千三百九十六首と見えたり。今ある本は、千四百二十六首ありて、其中に古今集の歌八首、こゝとかしこと二所に出たる歌六首見えたり。かくて、此千四百二十六首にて、二所にいでたる六首を除けば、八雲に千四百二十首とあるにはかなへども、なほ御抄のころの本に、同じきやあらずやは知がたし。又拾芥抄には、千四百廿首、或千三百五十六首とあり。千四百廿首は御抄と合ひ、或の方は何れともかなはず。^(六オ)

凡例

○歌の解トキさまは、鈴ノ屋ノ大人の、古今集遠鏡に過たるはなし。古への雅言ヤコトを、正しく今世イマノの詞ハハコトに訳ワカされたれば、其歌よみ出たるをり、其人の心に思へりしくまゝまで、残りなく我心の底に得らるゝ物は、遠鏡なり。故今も遠鏡の如くとかまほしけれど、そはいとゞ／＼大事なるわざにて、いささかの訳ワカしさまにて、いたく物ぞこなひとなる事も、又かの訳しさまに過たるはなく、おぼろげのものゝ、かけても及ぶべきならねば、今は、縣居ノ大人の、百人一首うひまなびなどのさまにもものしつ。されど、遠鏡の解トキさまの、げにと心に入て、心得やすく、つねにしかおもふより、又人々にもしかときさとしなれたる心は、おのづから、遠鏡さまのともすればうちまじりて、そこかしこと、打とけたる俗言ヤコトをまじへたるも多く、又詞の勢イキナひなど、委ユキくいはまほしき所々は、いよ／＼かの訳言ワカトのふりに物したり。そは上に細書とせり。

○六帖、家集などに見えたる歌、又異本、一本などの異同を、悉く記さむは、かへりてわづらはしければ、今は正しかるべく見ゆる方と、論ふべきふしあるとをのみ、かたはらにしるして、其他ははぶけり。

○古今集などに見えたる詞にても、又此集に初て見えたる詞などにても、少し耳遠きこゝちし、或はもとの意わきまへがたきやうなるなどは、ことに例など引出て、委ユキくものしつ。こは、うたてあまりなりと見ゆるふしもあるべけれど、おのがいまだしくたゞ／＼しきにくらべて、初学の人は、誰もかくやと思はるゝによりてなり。

○枕言の意を、委ユキくいはんとすれば、中々一首の意まぎらはしくなる(七オ)すぢもあるものなれば、大かたはもらしつ。されど、中には、其よみいれたるさまによりて、もとのこゝろをいはいはでは、事たらぬこゝちする所々もあり。さるをりには、縣居ノ大人の冠辞考をもとにて、これかれの随筆などに見えたる説をも引出てとけり。

○てにをはの事は、鈴屋ノ大人の、詞の玉の緒、世にひろまりてより、歌よむといふ人は、みなよく心得て、たれも明らめたるやうなれど、猶よく考へ合すべきは、此集のころの歌を以て、證アケテともすべければ、その歌につきて、こと

におどろかししらせたる事多し。そのてにをはのさまをよくものせざれば、歌の意たしかに心得がたき所々には、此玉の緒を引いで、うるさきまでさとしおけり。これ、歌をとくには、肝要の事なればなり。師翁又さらぬ人々、おのれが考などをもあげていへり。^(七)

○詞書のみだりがはしくふとわきまへがたきなどをば、詞のつかね緒をよりにて、鈴屋ノ大人のわきまへ正しおかれたれば、其所々に、つかね緒云と記て、其説を残なく頭書とす。こは本集の詞書とならべなどして、記さまほしけれど、さては、本集の詞書と見合せんに、たよりあしきふしもあればなり。さていふべきふしある所は、本集の詞書のつぎにしるしつ。

○作者の世系、官位の次第などは、要をつまみて記さんとすれば、作者部類を残なく記し、公卿補任、大系図、扶桑略記など、其ほかの書どもに見えたる事をも、用あるかぎりはつみ出たり。さて次序は、まづ此集の撰者たちをさきとし、次々は、歌のついでにしたがひて、春ノ上巻より次第で、巻の末に附たり。但其所書、其歌によりてはでかなはざることあるは、其所々にしるしつ。 猶委き事は、かしこにことわりおきたるを見てわきまふべし。

○此注釈にとり用ひたるは、為家ノ卿の抄はさらにもいはず、顯昭法橋、契沖阿闍梨の、記しおかれたるものどもをはじめ、古き記録、或はこれかれの物語書など、はた近き世ノ人の著したる書などまで、見聞及べる限は引出て世に広くおこなはるる書は、其作者の名をことにしるさす。 其書の巻なども委く記し、又古ノ今の世に名高き人々の説の、写本などに見え、或はたゞに聞伝へたるなどは、某云と記し、なほ旧き説などの見聞及ばざる所々は、同じ学のはらからにもとひはかりて、其中に考へ得たりと思ふ限は挙て、又某云と記しつ。おのが考へたる事と、誰にても思ひよりぬべき事とは、別に名をば記さす。さて其中に、事長き論などは、別に記てそへたり。

○人々の説をあげたるに、縣居ノ大人と記したるは、加茂ノ縣主真淵ノ大人、鈴屋大人ノと記したるは、本居ノ宜長

ノ大人、師といへるは、本居ノ大平ノ翁なり。其他の人々の説は、初て出せる所に、姓名ともに記し、つき／＼は名のみをしるせり。

○すべてむねといふべき事のかぎりは、本行に記し、今ひときざみ委くいはまほしきによりて物したると、ちなみにひかれて、是やかれやと思ひよりたる事などは、細書として別てり。

○漢籍（カウフ）どもに見えたる事は、いはでかなはざる事のみをものして、させる用なきふしをば、古抄などに引出られたるをも今ははふけり。かくて、此凡例にはまほしき事は多かれど、さまではうるさければいはず。其所々にもことわりおきたるを見て、わかまへなん物とてなり。さてかくこと／＼しげにはものすれども、もとより浅き学びにて、一度二度見たる書などの中には、えよくも覚えざるふし／＼もあれば、あやまれる事も、いひもらせる所々もあらんかし。そは後々にも、なほ考へ正してんかし。此新抄かきはじめたるゆゑよしは、師のはし書に見えたるが如し。

文化九年四月十八日

中山美石（丸ウ）

後撰和歌集卷第一新抄

春歌上

正月一日イ
元日に、二条のきさいの宮にて、しろきおほうちぎを給はりて

○二条ノ后は、清和天皇ノ后、贈太政大臣長良公ノ女、高子ときこゆ。扶桑略記、朝野群載、日本紀略などに委く見えたり。おほうちぎは、河海抄（桐葉）又、云、一ウキキヤ脱桂（ニ）有（ニ）大小、着（ハ）衣（ノ）上（ニ）云々。うはぎのうへに、うちぎを着（キル）なり。いろがさねは、きぬに

したがふ。長さ小袖とひとし。中へうらあり云々。男女共に着_レ之歟。或説云、女房は貴人着_スるなり云々。
 又、花鳥餘情 桐葉 又、未摘花に桂に大小あり。小桂は、宮、一の人、或は、あるじのきる物なり。きぬの上に表裳着_ス、
 其上にうちぎを着_ス云々。小うちぎは、女房のきる物なりなど見えたり。(一オ)

藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろごろもうちぎつゝ春來にけりとおどろかれぬる

○河海抄 初音云、みのしろ衣は、養の代に用たる心なり。下 桐葉「山里は草葉の露もしげからんみのしろ衣ぬはずともきよ。又、初音卷 詞、源氏物語は、卷々の名なども、人のよくしれる事なれば、こ云、かはぎぬはいとよし。山伏のみのしろごろもに、ゆづり給ひてあへなん」とあるなども、皆養の代の意なり。石原ノ正明云、養代衣は、雨衣といふ。今合羽と云物なり。平絹に蠟を引たるものなり。雨衣といふ文字、台記仁事記などに見えたり。かくて、此歌にては、白衣と云を、養代にいひかけて、うち着_スつゝといふ詞に、桂をかけたるなり。さて一首の意は、今たゞいま、此雪のつもれるが如き、白き大桂をかづきながら、是ぞ我身の上に、御患の春の来りしなりける。かゝる御患などにあはんとは、思ひよらざりしものをと、驚かれぬるよとなり。ふる雪のは、養代といはん料ながら、其時のさまにてもあるべし。三ノ句、つゝの詞は、末句の、驚かれぬるにかけて心得べし。此歌、上に石文字などのてにをはなく、ぬるとちぢたるは、鈴屋大人、同の玉の緒に、衣袴と出されたり。

玉の緒巻二十丁云、終りの句に、歌思の意ありて、留りの下に、かゝな又よなどいふ辞を加へて聞ク意なり云々。源氏物語は、かま「いもせ山かき道せば導ずて。だえの緒にふよ迷ひける。此歌につゞきたる歌に、「よとらむるも云々と有り、よみまどひけるよといふ意なればなり。是にていつれも油へ知るべし」とあり。

※此裳袴といふ物の事、御考へたる事あり。事長ければ、追考に出せり。

春立日よめる

凡河内躬恒

春たつと聞つるからに春日山きえあへぬ雪のはなと見ゆらむ

○春がたちしときくと其まゝに、春日山に消残である雪が、花と見ゆる事哉。いかでかく花とは見ゆるならんとなり。聞つるからその、からにといふ間は、俗(二)之言に、聞クヤイナヤリ。かくて、春になれば、花を見んとのみ思ひ居つれば、かくはあるなといふに近し。消あへぬは、消エオホセヌといふことなるなり。

にやといふ意も、ふくみて聞ゆるなり。古今上「心ざしふかくそめてしをりければ消あへぬ雪の花と見ゆらん。」

此歌などのてにをほの事、玉結巻六にいはれたるが如く、らんとは結びたれども、其事を疑ふにはあらず、然るゆゑを疑へるてにをほなり。さるゆゑに、皆かたといふに通り、右に引たる古今の歌にていはゞ、消あへぬ雪の花と見ゆる、其事は疑ひにあらねば「花と見ゆるかな」といふ意なるを、さやうにはなと見ゆるゆゑを疑ひて、何とりかゝりて、らんとは結びたる、二ノ句三ノ句などの終に、を文字にもじなどの辞(テニヤ)有て、らんとは結びたるに多し、古今春上「春の色のいたり至らぬ里はあらしさけるさかざる花の見ゆらん。同夏「郭公われとはなしに卯花のろき世の中に囀歌るらんなどの如し。委くは、玉結を見て心得べし。

※ 用語ノの文字とは、消あへぬ雪のノの文字
 なり、此のもし、俗にはサといふなり。

兼盛王

けふよりはをぎのやけ原かきわけて若菜つみにとたれをさそはん(二)

○歌の意明らかなり。末句は、其事をいたく興ある事に思へる意なり。兼盛集「もろともに我をる宿の梅の花あかぬにはひを誰に見せまし。重之集「初霜のおかぬだにこきもみち葉の色のさかりをたれに見せましなどの類なり。

此歌、大和物語には、む月のついたちごろ、かねもり、大納言殿にまゐりたりけるに、物などのたまはせて、すゞろに歌よめとのたまひければ、ふとよみたりける、「けふよりは云々とあり。萩の焼原は、拾遺(春)「春日野のをぎの焼はらあさるとも見えぬなき名をおほすなるかななども見えたり。此集やはじめならん。

ある人のもとに、にひまゐりの女の侍けるが、月日ひさしくへて、む月のついたちごろ、まへゆるされたりけるに、雨のふるを見て

注つかね緒云、或人の許に、にひまゐりの女、月日久しく経て、むつきのついたちごろまへゆるされたりけるに、雨のふるを見て

○にひまゐりは、新参なり。さて此詞書、もしよみ人の名を挙たる歌のならば、にひ参りの女の侍けるがとは、書くまじき例なり。即チその人の歌なればなり。然れども、名をあげずして、たゞ女、或は男、或はおや、或はむすめなどいへる詞書は、かやうにも書ク例なれば、是は難にはあらざるを、なほの侍けるがと云詞はのそくべきなりと、詞のつかねを見えたり。

よみ人しらす

しら雲のうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる

○うへとは上日の事、俗につとめ日といふ。新参のほど、とばかり局にありて、さて主君のまへゆるされたるなりと、正しいへり。詞書の、まへゆるさるといへる、則チ此ことなり。かく主君の前に出る事をゆるされたるにて、月日久しく経たるかひありとしれりとなり。春雨のと、枕言のやうにおきて、降るを經るにいひかけたなり。詞花々「もろとも山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらずやとあるなども、あはせてしるべし。

朱雀院の、子日におはしましけるに、さはること侍て、えつかうまつらずして、延光朝臣に遣しける

○朱雀ノ院は、すざくの院（井）累代の後院と、拾芥抄にも見えて、おりゐの帝の、大まします所なり。されどこゝ

にいへるは、寛平法皇の御事をさし奉るなり。つかうまつるは、ツカウマツル、仕奉るを、音便にいへるなり。延光ノ朝臣は、此ころ、院の執事などにやありけん。下春中巻なる大の詞書（延光ノ朝臣のかたり侍ければ云々）などのさまも、人よりこ

とに、此院に参られたるやうに聞ゆればなり。猶よく考ふべし。さて、子日の遊には、小松を引くと、若菜を

摘ムと、二つの事をする事となり。但、若菜をつむのみは、いつとさだまりもなく、春の野の遊びのわざな

れども、子日の遊といふ時は、必ス小松と若菜と、相離れざるなり

古く歌にも物語書にも見

えたる、皆同じ。若菜巻「小松原末の上はひに引かれてや野への若菜も
年女のむべきなど、其時のさまをも思ひ合すべし。」こは、後世に、子日には、小松をひく事のみの如く、心得あやまれる人もあめれば、ことさらにはいふなり。かくて、子日の遊に小松を引くことは、昔は松葉を食ひしものなり。十二種の菜の一種にて、年中行事秘抄、猶何くれの書に見えたり。今も食ふといふ。信濃国、小縣ノ郡の人の、物語なりと、正明云へり。

左大臣(四ツ)

松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしか桜はやもさかなむ

○初二ノ句は、松も引かず、若菜も摘まずと云事なり。かくさはる事有て、今日の御供にもつかへまつらねば、松もひかず、若菜もつまずなりて、心やらんかたなし。桜だに咲かば、花を見てなぐさまんを、桜はいつかさくべき。早くもさけかしとなり。此初ノ句の如きてにをは、万葉十七歌長に、「萩の花、にはへる宿を、朝庭に、出立ならし、夕庭に、ふみたひらけず云々とあるも、朝シツクにも出たちならず、ゆふべにも踏フミたひらけずといふ事なり。又、蜻蛉日記中下に、「身をすてうきをもしらぬ旅だにも山路にふかく思ひこそ入れ。これも、身をすてもせず、憂きをも知らぬと云意なり。

院御返し(五オ)

まつにくる人しなれば春の野の若菜もなにかひなかりけり

○初二ノ御句は、左大臣殿に、其許が来られざればとのたまふ御意なり。下ノ御句は、小松引若菜摘など、すべて今日の御幸の何事も、はえなくして、興ありとはおぼさぬとなり。季吟法印ノ抄に、何もは、おしこめたる義なりといへるがごとし。貫之集「わがゆかたでたどにしあれば春の野のわかかなも何もかへり来にけり。さて初の御句は、

待を松にひゞかせてのたまはせしなるべし。

子日に、男のもとより、けふは小松ひきになん、○野べにイまかり出るといへりければ

よみ人しらす

君のみや野べに小松をひきにゆく我もかたみにつまんわか菜を

○君ばかり小松を引に行給ふにや。我もをさそひ給はゞ、我もとも(五ウ)にゆきて、たがひにつまん物をといふを、若菜を摘入る器の、籠カゴにいひかけたるなり。末句のをオカじ力チカラありて、怨る意こもれり。さて此歌などは、恋の部に入るべきさまなり。此類、以下の巻々にもをりく有て、これ此集のくせなり。部立、歌の次序などには、あながちになつむべからず。

題しらす

霞たつかすがの野べのわかかなにもなり見てしがな人もつむやと

○もし思ふ人の、我をひきつむや、野べの若菜になりて、つまれて見たき物なり。若菜は、誰にてもつむ物なればといふなり。つむとは、俗の諺に、我身をつめりてなどいふ(六ウ)に同じく、指にてひきつむことなり。人をひきつむは、けさうじ戯るゝをりのわざなり。それを若菜を摘ツメむにいひかけたり。初ノ句、霞立は、春日の枕辞なり。さて此歌は、古今集、誹諧歌の部に、寛平ノ御時、后ノ宮の歌合の歌、藤原ノ興風「春霞たなびく野、べの云々とて載せられたり。げに一首の意、誹諧歌と聞えたり。

子日にまかりける人の許に、おくれ侍て遣しける

みつね

春の野に心をだにもやらぬ身はわか菜はつまで年をこそつめ

○春の野に、我此身のゆかぬのみならず、心をまでもやらぬ身は、若菜をばつまずして、たゞ年を積ツクのみぞとなり。心をやるとは、俗に氣キを晴らすといふに同じ。それを今は、ひきこもり居る事にいひかけて、さて若菜はつまで云々と、たゞかはせられたり。心をやるとよみたる歌は、万葉十一「春の野に心やらんと思ふどちきたりし今日はくれずもあらぬか。後拾遺上」正月子日、庭において、松など手ずさびに引侍けるを見てよめる、「春の野に出ぬ子の日はもろ人の心ばかりをやるにぞ有ける、など猶あり。さて此歌、若菜はつまでといふを、若き意にいひかけたるならんかと、我友夏目ノ甕磨いへり。げに然らんか。拾遺上に、「春日野に多くの年はつみつれど老せぬ物は若菜なりけり、とあるなどは、若き意にかけていへればなり。

宇多院に、子ノ日せんとありければ、式部卿みこそさそふとて

行明親王

○式部卿ノみこは、御諱は重明と申て、行明ノ親王の御兄みこなり。此親王の御事、栄花物語にも見えたり。

行明ノ親王は、上総(七オ)大守、延喜第二、実は寛平第十の御子と、作者部類にも見えたり。されば、御祖父御実は御父帝、宇多ノ上皇の大まします、宇多ノ院の御庭にて、子ノ日の御遊あらんとのことゆゑに、御兄式部卿のみこそ、誘ひ給ふとてといふ事なるべし。

ふるさとの野へ見にゆくといふなるをいざもろともに若菜つみてん

○一首の御意は、かくれたる所なし。御父帝の大まします所なれば、故郷ふるさととはのたまへるなるべし。子ノ日の御遊

には、小松引若菜摘、ともに野べにてのわざなれば、今は御庭にて御遊はありとも、御歌にはかくのたまはずべき事なり。季吟抄には、宇多ノ院は西ノ京なれば、古里の野べ見にゆくとなりといへり。此説もすてがたし。其意ならんには、野の御幸もありしにや。そはしりがたし。(七七)

はつ春の歌とて

紀友則

水のおもにあや吹みだる春風や池のこほりをけふはとくらん

○水の面に模様をなす風が、春立チつれば、今日は池の水を、ふきとかすにてあらんとなるべし。上二句は、春風の常をいへりと見ん方、然るべし。白氏文集に、池有波、文水盡開、といふ句によられたるにやと見ゆれど、此詩は、氷のとけたるを見たる意なり。此歌は、時節に感じて、思ひやりたる意と聞ゆれば、いさゝかかはれり。但、此歌をも、三四五二と、句を次第して見れば、詩ノ句の如くに聞ゆれども、さては歌ざまおとるやうなり。伊勢集に、「水のおもにあやおりみだる春雨や山のみどりをなべてそむらん。此歌のつとけをも思ふべし。」

寛平御時、きさいの宮の歌合のうた(八オ)

○寛平は、宇多ノ天皇の御時の年号なり。御時を、おほんときとよむは、大御時を、音便にてとなふるなり。

すべて、天皇の御事には、大御代、大御食(ミケ)など、御の字の上に、大(オホ)といふ言をそへてあがめ奉るなり、よりにて、天皇の御事の外に、後世みだりに、おほんといふはわろしと、縣居ノ大人云へたり。きさいの宮は、后(キサキ)ノ言を、きさいの言となふるも、音便なり。

七条ノ后温子と聞えて、昭宣公の女なり。契沖阿闍梨古今集云、袋草紙云、仁和四年、十月六日、入内。菅家方

葉集ノ序に、寛平五年とあれば、歌合はそれよりさきなるべし。立后は九年なれば、初にめぐらして、後の宮

とはいへり。縣居ノ大人云、此宮の歌合の歌ども、新撰万葉集即菅家方葉集なりに有を、此集古今集云には採られしなり。

此時の歌ども、ことによるしく聞ゆ。歌合は、歌よむ人を左右に立て、勝負を定せらる。其歌を、洲浜スヘなどの作り物にもつけ、又ハクつくりものゝ水などにも書つけ、さまざまの風流カザハをつくして、遊ばせ給ふなり。歌合の記と云物に見えたりと古今集に打懸いはれたり。然れば、今此後集に載せられたるも、同じことなり。

よみ人しらす

ふく風や春たちきぬとつげつらん枝にこまれる花咲にけり

○春が立たるぞと、花の木に、風が告ツグしらせやしつらん、枝の中に隠カモリて有し花が開出サキイたるよとなり。春たちきぬは、春立チキ来ぬなり。さて花は、広く春咲花をさしていふなるべし。後世に、花といへば、桜ぞと心得るとはかはれり。古今集此集ともに、桜の歌は、大かた桜とよめり。又花とよみたるには、詞書に桜とことわれり。

しはすばかりに、やまとへ、ことにつきてまかりけるほどに、やどりて侍ける人の家の、むすめを思ひかけて侍(九才)けれど、やむごとなき事によりて、まかりのほりにけり。あくる春、親のもとにつかはしける

○ことにつきては、俗に用事ヨウジありてといふにおなじ。公私の事は、同じ見えざれば、今はさだめがたし。やむごとなきは、もとなほざりにしがたき意よりいひて、もだしがたしといふと同じくて、無ナシ止事トコトなり。高き人をいふも、なほざりにしがたき意より出たるなりと、鈴屋ノ大人いはれたり。

みつね

春日野におふるわかかなを見てしより心をつねに思ひやる哉

○かの思ひかけたるむすめを、若菜になぞらへたるのみ。春日野(九才)は、大和国なり。貫之集「あし引の山への松をか
つ見れば心を野べに思ひやるかな。さて此歌も、恋の部に入べき歌なり。

かれにける男のもとに、其すみけるかたの、庭の木のかれたりける枝をよりて、遣しける

○かれにける男とは、此作者と相馴て、此作者の許に通ひすみたるが、今は絶たるなり。すべて、男の女の許へ通ふを、すむといふは常なり。又いにしへは、今世の如く、男の家へ、女をむかへおくる事は、をさくなく、女は、男の許へ、男の通ひたるなり。物種書などにも、多く見えたるが如し。其すみける云々は、其男の通ひ来て、いつも居たる所の、庭

の木の枯たる枝を折て、此歌をつけてやりたるなり。

兼覽王母女イ

もえ出るこのめを見てもねをぞなく枯にし枝の春をしらねば（十オ）

○今かく春になりて、木々の芽の出るを見ても、かくの如く一度枯たる木は、春といふ事も知らで、終に枯果るなり。我に離あはたる人も、此枯枝の如く、二度たち帰り給ふ事はあらじと思ひて、音をなき待るといふなり。

女の、宮つかへにまかり出て侍けるに、めづらしきほどは、これかれ物いひなどし侍けるを、トイほどもなくひとりにあひ侍にければ、むつきのついたちばかりに、いひつかはし侍ける

○男女の間にかけて、物いふ、又相するなどいふは、大かたは契かたらふ事なれども、此所に、これかれ物いひなどいへるは、たゞ戯言などいひかけたるのみにて、女の聴入きこたるにはあらず。ほどもなく一人にあひ侍とある方、まことに契ちぎかたらひしことなればなり。

よみ人しらず

いつのまに霞たつらん春日野の雪だにとけぬ冬と見しまに

○春日野の雪もまだとけぬ、冬ぞ／＼と思て居るうちに、いつのまに春といふ時になりて、霞が立し事ぞといひて、さて、春になりたりとは、一人の男に逢たるをいふなり。

四ノ句の、とけぬといふ詞は、歌の裏の意、女の上にては、打とけぬなどいふに同じ意ながら、俗言にいはず、ヤボナ、ウチ氣ナなどいふに近し。

題しらず

閑院左大臣

なほざりにをりつるものを梅の花こきかに我やころもそめてん
思ひし物を ことししみなん六

○意あきらかなり。下に「梅の花よそながら見んわきもこがとがむばかりの香にもこそしめ、とあるをも引合せて心得べし。末句は、染てんと有て、しめてんとよむべきを、染ノ字なるより、そめとは写誤れるなるべし。色には、そめは、そむきほまるゝころは仮(かり)字なれば、其書たる文字の意にはさしもなづまず、詞の方をむねとは心得てよむべきわざなり。又思ふに、恋の歌にて、初めは、かりそめの戯に契つるを、終には、まことに深き中ともなりゆくべきやうに思はると、いふ意の如くも聞ゆれども、いかゞあらん。

前栽にこうばいを植て、又の春おそく開ければ

○前栽は、字音にてセンザイとよむなり。屋舎の前の、木草の花など、植る所の事にて、今ノ世に、庭前と云に同じ。此詞や古くは見あたらず。伊勢物語廿三又古今集維下「風よけはおきつ白に、せんさいの中にかくれて見ければと見え、河海抄(十一ウ)巻に、壺前栽、清涼殿ノ東ノ庭并西ノ庭、朝餉并台盤所前、被栽前栽ニ延喜元年、左右衛門栽ニ草架一とあるやはじめならん。源氏ノ物語などには、あまた所に見えたり。こうばいは、紅梅なり。拾遺集ノ物名ノ歌に、「うぐひすの巢つくる枝をよりつればこをはいかでかうまんとすらん、とあるなどを以て見れば、常には字音にてよびたりと見ゆ。おそくさきければは、咲ッことの遅かりければといふ事なり。集中の同書にも例あり

藤原一
中納言兼輔朝臣

宿近くうつしてうゑしかひもなくまちどほにのみにほふ花かな
見ゆる 大和物語

○やど近くと、待遠とを対へて、あやとせるのみ。下夏に「ほととぎす来ぬる垣ねは近ながらまち遠にのみこゑの聞えぬ、とよめるもあり。」(十二卷)

延喜御時、うためしけるに、奉ける

○延喜は、醍醐ノ天皇の御時の年号なり。故レ此天皇を、延喜の帝とも申奉るなり。

紀貫之

春霞たなびきにけり久かたの月のかつらもはな今六やさくらん

○春は諸木の花咲ク時なるゆゑに、月の中の桂樹も、花さくやらん。其桂の花のほひにて、かく霞むと見ゆるとなり。古今上秋「久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらん。ともに其をりのけしきを見て思ひよせたるなり。月の桂は、兼名苑云、月中有河。河上有桂樹。高五百丈云々。これより出たるなり。」

おなじ御時、みづし所にさぶらひけるころ、しづめるよしをな(十二卷)げきて、御らんせさせよとおぼしくて、ある女家集蔵人におくりて侍ける十二首がうち

○おなじ御時とは、上の詞書をうけていへるなり。則チ延喜の御時といふ意なり。御厨子所は、朝夕の御膳を供す。別当、預リ、所ノ衆等有云々と、拾芥抄に見えたり。しづめりとは、官位など給はるべきほどにも給はらぬをいへるなり。蔵人は、御側近く侍て、小事の御取次など仕る官なり。職原抄等に委しく見えたり。

みつね

いづことも春の光はわかなくにまだみよし野の山は雪ふる

○君の御恵はあまねきことなるに、我身はいまだ、其御恩沢にあづからざることよと、あやしめるなり。わかなくには、わかぬになり。重之集「雪消ぬ我み山なる草木には春もまだこぬこちこそすれ、貫之集「みよし野の吉野の山に春霞たつを見るく雪ぞまだふる、など皆同じ意なり。

人のもとにつかはしける 伊勢

しら玉をつむむ袖のみながるゝは春はなみだもさえぬなりけり

※ 此歌などの、末句の、なりけりといへるは、こと比力あり、こは其事を、おしはかり思ひさだめて、深く感ずる意なり。春ハ涙モ水ヲヌノシヤワイナ、といふ語勢なり。いづれの歌も、すべて其てにをはの違ひさまによりて、其歌の語勢を、よくあちはひ見るべきことなり。

○白玉をつむむ袖とは、涙をおさふる袖をいへるなり。古今二恋一「つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけりの類なり。二の句の、のみという言はひたものといふ意にて、三ノ句、流るゝはへ掛れり。袖ばかりといふ意にはあらず。さては一首の意さらに聞えず。

さえぬなりけりは、石塚龍麿云、万葉一に「磐床イハゴと川の氷ヒこどり冷夜サカレを云々とあるや、はじめならん。十三六帖一の歌に、年

「霜雪のきえてうき身のしづくこそ袖たはむまでさえかゝりけれ。伊勢集に夫木抄卅六冬歌、能「なみだ川こひより出て因法師

流るればかく氷るよもさえぬなりけり、などあるを思ふに、水の氷るをさゆといへるなり。涙もさえぬとは、涙の流るゝをいふ。冬ノ月をさゆるとよむも、水の如くさえて見ゆればなりといへり。なほ、新古今雑下「天の原あ

かねさし出る光にはいづれの沼かさえ残るべき、とあるも同じ。又、涙も氷るものゝ如くいへるは、古今上春「雪の

うちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくらん、新古今上維「年くれし涙のつらくとけにけり昔の袖にも春やたつ

らん、など猶あり。かくて一首の意は、袖につまんとする涙の、つゝみあへずして、かくひたものに流るゝは、

春は、氷も解けて流るゝ時なるゆゑに、十四我が涙も氷らずして流るゝよな、といふなり。

人に忘れられて侍けるころ、雨のやまずふりければ

よみ人しらす

春たちて我身ふりぬるながめには人の心のはなもちりけり

○春になりて、また一つ年を重ねて、我姿の段々旧くなるをわびて、物思ひをして居る頃の長雨には、槍に咲たるのみならず、思ふ人の心の花も散たるよな、といふなり。実は忘れられたるゆゑに物思をするなれば、我身の旧ぬるゆゑに、忘れられたりといふ意なるを、長雨に花の散るによせていへるによりて、ながめには、人の心の云々とはいへるなり。小町古今の、「花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに、を思ひてよめるにもあるべし。心十四ウの花とは、さかりに思ふ時の心は、なつかしくはなくしきをいふ。古今五恋「色見えてうつるふものはよの中の人の心の花にぞありける、なども同じ。雨の降ぬるに身の旧ぬるをかけ、物思ひ俗に心苦(シンク)を、長目ナガメといふに、長雨をかねたり。さてながめとは、心におもふ事などあるをりに、其さし対ウカひたる物を、見るとはなくて、たゞまもり居るやうの意なり。故にながめといへば、大かたは物思ひのある時の事になるなり。長目の字にて大かた但、海意とは、聊別(コト)なり、見るといふとは、いよ／＼異なり、見るといふは、花にても月にても、其対ひて見る物のうへに用ありて、其物を見るをいふなり、当れり、眺字などのながめとは、其対ひたる物には用なくて、たゞじつとまもり居る、をいふなり。いはゞ其対ひ居る物は、月か花か寛えはなきといふほどのことなり。十五ウ 但、海

だいしらす

わがせこに見せんと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれゝば

○万葉第八に、山部宿祢赤人ノ歌四首として出せる中の一首なり。我せこは、友をいふと、橋ノ千蔭ノ鶯の略解に見えたり。梅の花の咲たるを、友どちに見せんと思ひたれど、雪のふりつもりたれば、それとも見えずなりぬとな

り。縣居ノ大人云、男ども互に吾兄子といふは、貴び親めるなり。万葉十七に、越中ノ介繩万呂の、守家持へ贈る歌に、「和我勢古我、久尔弊麻之奈婆云々。其家持のこたへに、安礼奈之等、奈和備和我勢故云々とよみ、又同家持池主の贈答には、ことにあまたあり。其外にもありと、万葉考のいはれたるが如し。吾兄子(ワガセコ)といふ詞の事は、下に、わざもことある所に委いふを引合せて心得べし。(十五ウ)

来て見べき人もあらしな我宿のうめのはつ花をりつくしてん

○万葉卷十に「きて見べき人もあらなくにわぎへなる梅の初花ちりぬともよし、とあるを、いさゝか引なほして、載せられたるなるべし。末句、をりつくしてんは、心のまゝにをらんといふ意なるべし。手折て棄んといふにはあらざるべし。次の歌をも見合すべし。初句の来て見べきは、来て見るべきなり。

射(イ)、着(キ)、似(ニ)、干(ヒ)、見(ミ)、居(イ)などの詞に、る文字をそえて、切る、聞と、つとつ聞とをなれたるは、後の定まりにて、よるくは、万葉集十に「春野のうはぎつみて煮(こらしも、古今集に「花とや見らん、六帖六に「松がえのときはた似べき、後漢集に「来て見べき人もあらしな、土佐日記に、似べき、など第二の音、いきにひみるより、切る、聞をうくるてにをはを用ひたりなど、本居ノ春野ノ境、言葉のやちまたに、いはれたり。かれば、見べき、似べきなどいふは、古き詞違ひ、る文字をそへて、見るべき、似るべきなどいへば、近世のよりの詞違ひなり。此詞の活用(ハタラキ)の事は、初季の人には、たやすくは心得がたき事なれども、しらではかなはざる事なれば、くはしくは、やちまたを見てむきまべし。(十六ウ)

ことならばをりつくしてん梅の花我まつ人の来ても見なくに

○ことならばは、とても云々ならば、といふ意の詞なり。此歌にては、とてもわがまつ人の来ても見ぬに、とても此やうに来ても見ぬくらゐならば、一向に折戻さんといふ意なり。古今下「ことならばさかずやはあらぬ桜花見る我さへにしづこゝろなし。同別「ことならば君とまるべくにははなんかへすは花のうきにやはあらぬ。同別「こと

ならば言の葉さへも消なゝん見れば涙のたきまさりけり。又こととはとのみいへるは、同別「かきくらしことはふらなん春雨にぬれ衣きせて君をとよめん。此歌も、春雨の、とても降るほどならば、くらやみだちて、ひたくと降れかしといふ意なり。いづれの歌をも、よく味ひ見て心得べ

し。

ふく風にちらすもあらなんうめの花我かりごろもひとよやどさん(十六ウ)

○梅花の風にちるを見て、今宵ばかりだに散らずもあれかし。木の下に宿りて、わが狩衣に香をしめんと思へばといふにて、末句の、やどさんはやどさしめんといふ意なるべし。一夜とある詞のさま、しか聞ゆるなり。

我やどの梅のはつ花ひるは雪よるは月かと思えまがふかな

○意明らかなり。初花といへるは、このごろ咲そめたる花なれば、しかいへるなり。必しも初花ならでも、心は同じ。上に「来て見べき人もあらじな」とある歌もおなじ。

梅の花よそながら見んわぎもこがとがむばかりの香にもこそしめ

○梅ノ花をば、遠く離れたる所のまゝにて見ん。もし近よりなば、いかなる女のうつり香にかと思ひて、我が妻のとがむるほどの香に(十七オ)やしません。さやうにてはわろきに、といふ意なり。古今上春「梅の花たちよるばかりありしより

人のとがむる香にぞしみける、などをも思ふべし。よそとは、遠く離れたるをいふ詞なり。恋の上にて、よそになるなどいふいよなわぎもこは、吾ワガ妹子メコの約ヨクたるなり。仁賢紀の古註に、古者、不レ言、三兄弟長幼、二女、以レ男、称レ兄、男、以レ女、称レ妹。とあるは、上つ代より、末の代まで通れる事にて、神代紀を初め、源氏物語などにも、姉アノをさして、

いもうとといへる事見えたり。然れば、もとはたゞ、男女といはんが如くなるを、近世になりては、夫妻の中をの

みいふ如くはなりたるなり。此末句の、もこそ又もその語は、さきをあやぶみて、もし云々にやあらん。さありてはよろしからぬに、といふ意こもるなり。此例に通へるも、まれにはあれど、そはいとまれなる事なり。なほ要しくは、玉緒三の巻、十九のひら、五の巻、三ノ校を

見て心梅
べし。

素性法師 (七七〇)

梅花をればこぼれぬ我袖にほひかうつせ家づとにせむ

○家づとにせんとて、梅の花を手折つれば、はら／＼と袖に散かゝりて、なほ其袖にもたまらずなりゆくを、こぼれぬといはれたりと聞ゆ。其さま見るが如き詞なり。さて、せめては、我袖に匂ひなりともうつせ、其香をだに家づとにせんとなり。にほひかは匂ひ香なりと、為家卿の抄に見えたりと、季吟法印は記されたれど、今ある為家卿ノ抄には見えず。されど意は違はず。竹川巻九葉、兼雪の事に、げに、いと若うなまめかしきさまして、うちふるまひ給へるにほひかななど、よの常ならず云々と見えて、にほひ香は、にほふ香をいふと、鈴屋ノ大人もいはれたり。此にほひかといふ詞、いとめづらしきゆゑに、心得がたきこゝちすめれど、さりとして、家集の方にては、歌ざまいたくおとる今人べし。契沖阿闍梨も、にほひはの誤かといはれたれど、なほ一首の勢ひおとるさまなり。

をとこにつきて、ほかにうつりて

よみ人しらす

心もてをるかはやなうめの花香をとめてだにとふ人のなき

○我心として外へうつりし事は。我心としてうつりしにはあらず。男につきてかくうつりたるは、せんかたなきことなるに、たとひ我をばうとむとも、梅花の香をだに人のとひこぬは、わけもなき、うらめしきことかなと、いふ意と聞え、為家卿の抄も、此意なりと、季吟法印の抄には記されたり。なほ詞書のさまなどには、いさゝかいぶ

かしきふしもあれど、そを論はんには、いと長々しく、さらでもひとわたりは聞えたる歌なれば、こゝにはいはず。此歌の未向などの如く、用語のものより（十八ウ）かゝりて、き、又、ぬなど結びたるは、玉緒に、そのや何と出されたる中のものもして、変格にはあらねど、なほ思ふに、そもじなとよりかゝりたるとは、いさゝか異にて、変格に近く、歎息の意を軽くよくめるやうなり。下「谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなく声わかみ人ふをも、引合せて見るべし。」

としをへて心かけたる女の、ことしばかりをだにまちくらせといひけるが、又のとしもつれなかりければ
人心うさこそまされ春たてばとまらず消るゆきかくれなん

○世にありて、うさのみまさりゆく人を見んよりは、春たてば、雪の消て無くなるが如くに、我も世を遁れかくれんとなるべし。古今下雑に、「世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし。拾遺上雑」（十九ウ）「うき世にはゆきかくれなでかきくもりふるは思ひのほかにもあるかな。同秘五」（十九ウ）又「いづかたにゆきかくれなん世中に身のあればこそ人もつられなれど、皆世をそむきて、隠遁する事にかけていへるなり。」

題しらず

梅花かを吹かくる春風衣六に心をそめばひとやとがめむ

○四ノ句、心をそめば、六帖に、衣とある方まさるべきか。心をしむるといへる例も、新古今上巻「春ごと心にをしむる花の枝にたがなほざりの袖かふれつる、などはあれど、「人やとがめんとあるには、衣の方似つかはしきやうなり。一首の意は、上の「梅花よそながら見ん云々、古今の、「人のとがむる香にぞしみける、などに同じかるべし。さて、四ノ句そめば、例のしめばの写誤なるべし。」

春雨のふらば野山にまじりなん梅の花がさありといふなり(十九)

○野山にまじりなん。春雨のふらば、梅の花笠がありといふなり。然らば、さしもぬるゝ事もあらじをといふ意なり。まじりなんは、まじらんといはんが如し。此などの雨は、上のかゝりによりて、願ふ意になると、然らざるとの竹をちめりあり、それらの事、末に委くいふべし。野山にまじるとは、野山を

わけあそぶをいふ。竹取ノ物語云、野山にまじりて竹をとりつゝ云々。古今下「いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花のかげかは。梅の花笠は、催馬楽舞に、「あをやぎをかた糸によりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ、これをはじめにていへり。

うちまらし
かきくらし雪はふりつゝしかすがに我わぎへのそのに鶯なくもぞなく万葉八

○しかすがには、然しながらになり。さすがにといふも同じ。万葉に、然為我二と書たり。下のかもじ濁るべし。

わぎへは、我家を約たるなり。(二十)万葉卷八には、吾宅、卷五には、和止幣、又、和我わがも書たれば、わがへとよまんも然るべし。一首の意は、かきくらし雪は降れども、然しながら春なれば、鶯のなくといふなり。万葉卷十「山のまに雪はふりつゝしかすがに此川やぎはもえにけるかもとあり。

谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなくこゑわかみ人のすさめぬ

○二つのみもじは、谷が寒さに、鳴声が若さに、といふ意なり。山高み、風をいたみ、潮を早み、など、此類のみもじ、皆同じ。但下冬に、「かみな月よりみよらすみ云々」ともはことなり、此事は、かしこに

委いふすさめぬは、見る物にていはど、目にもかけぬといはんが如く、聞く物ならば、耳にもとめぬといはんが如し。俗言に、食着せぬといふに近し。賞シヤツツせぬ意なり。古今上「山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさん、同上難「大あらしのもりの下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし、など皆同じ。一首の意は、谷が寒さ

に、春は来ても、いまだ巢立得ずして、なく声がささなさに、誰ありて、耳にとめて、鶯が鳴よと賞翫する人もなしとなるべし。又思ふに、此歌も、上にもいへるが如く、用語のものよりかゝりて、ぬとむすびたるは、末句に歎息の意ありて、「人のすさめぬよ、といふに近きやうなり。然るときは、たゞ鶯の上をよみたる歌とも思はれず、もしは恋ノ歌などにて、我がいまだ人なみ／＼にもあらぬ身ゆゑに、我いふ事などを、人の耳にもとめざるよと、我身をなげく意などにはあらじか。師云、件の説々にて、よく聞えたれど、又いさゝか思ふに、こゑわかみといふは、古今集の「春たてど花もにははぬ山里は物うかるねに鶯ぞなくとあると、合せて考ふるに、鶯のこゑの、いまだ心よく花やかにはずして、俗に、谷わたりといひて、(二十一)ち／＼といふやうに、うひ／＼しくなくをいふにてもあるべし。ものうかるねも、いまだこゝろよくはなかがざるを、しかいへるやうに聞ゆればなり。又云、同じ古今に、「はてはものうくなりぬべらなりとあるは、こと／＼なりこは、大平が新説なり。とる人の心々によるべしといはれたり。

鶯のなきつる声にさそはれて花のもとにぞ我は来にける

○白氏文集に、鶯ノ声ニ誘引^レ来^ルニ花ノ下ニ^ニとあるによりたるなるべし。又、重之集に、「うぐひすの声によばれてこちくれば物ははぬ花も人まねきけり、ともあり。

花だにもまださかなくに鶯のなく一こゑを春と思はむ

○花もいまだ咲ぬ時節なれば、春めきたる事もなし。たゞ、鶯のまれになくを、春のしるしとは思はんとなり。古今上「はるやとき花やおそきとき(二十一)わかかん鶯だにもなかずもあるかな。

君がため山田のさばにゑぐつむとぬれにし袖ほせどは今もかはかず

○万葉十に「君がため山田の沢に恵具あづかつむと雪げの水にものすそぬれぬ、とあるによりたるなるべし。ゑぐつむとは、女メ萎シ摘ツとしてなり。とてを、と、の、の、み、い、へ、るゑぐは、袖中抄云、女メ萎シ、花ハすわうにさく。水辺の草なり云々。また、万葉十一には、「あしひきの山沢回具ともよみて、東国にては、興ホト其コトといひ、土佐人は、ゑぐといへり。葉は蘭アに似て小さく、根は白く、小さき辛イありて、味少しゑぐし。俗黒くわるといふ物の類なりと、千蔭ノ翁略解いはれたり。猶、縣居ノ大人万葉考の別記に、委イくいはれたり。一首の意は、古今上に、「君がため春の野に出てわかなつむ我衣手に雪はふりつゝ、といふ歌の御意に似て、其摘ツたる時の勞を、つよくいへるは、則君がためにと思ふ心の深きよしなり。」

あひしりて侍ける人の家に、まかれりけるに、梅の木侍けり。此花さきなん時、かならずせうそせんといひけるを、おとなく侍ければ

○此かへし、紀ノ長谷雄ノ朝臣なれば、家は、其家なるを、あひしりて侍ける人の家とあるは、ひが事なり。此たぐひ集中に多しと、つかね緒に見えたり。せうそせんは、消息せんにて、必メつげやらんといふことなり。おとなくは、俗言にいへば、何ノサタモナク、といふ意なり。

※つかね緒云、紀ノ長谷雄ノ朝臣の家にかれりける時見けるに、梅の木侍けり。あ
るじ。此花咲なむ時、かならずせうそせんといひ侍けるを、おとなく侍ければ

朱雀院の兵部卿みこ

(二十二)

梅の花今はさかりになりぬらんたのめし人のおとづれもせぬ

○たのめしは、令メ頼シにて、頼シに思はせたるなり。必ズ消息せんと云ヒて、我に、たのましめし人のといふ事に

て、即、長谷雄ノ朝臣をさゝせ給ふなり。一首の御意は、彼うめの花は、もはや盛になりたるにてあらん、然るを、此花の咲たらば、必メ消息せんなどいひて、我に頼に思はせたる人の、何のおとづれもせぬ事よとなり。

かへし 一本、又つかね緒

紀一本 中納言長谷雄朝臣

春雨のいろかはるにやにいかにぞ梅梅やにほふらんわが見る枝枝は色もかはらず

○いかにぞ、春風に梅梅やにほふらんと、詞をおきかへて心得べし。いかに侍るぞ、今は盛になりぬらんなど、のたまひおこせ給ふは、さては、君があたりの梅は、此ごろの風に、にほひ侍るにや。此方の見て居る枝は、いまださくべきけしきも侍らず。さるゆゑに、契おきたる消息も、し侍らぬなりといふ意なり。上ノ句のてをば、玉緒巻三の、十六、十七のひらに「兼ひて問かくるぞとて出されて云う、これは、必上に、何等の辞をおきて、そと切るなり。後撰一、「春風いかにぞ」と云々。拾遺廿「こゝにだにづれ」となく時鳥ましてこゝの杜はいかにぞ一。同十二「ゆめかとも思ふべけれどねやせし何ぞ一心にわすれがたきは、などあるを見てしるべし。されば此歌も「いかにぞ」と切て、「梅やにほふらんと結びたるなり。

春の日、ことのついでありてよめる

よみ人しらず

うめの花いであ、六ちるてふなべに春雨六のふりてつゝな六くうぐひすのこゑ

○ちるてふの、てふ詞のも、といふの約すててふは、といふの約なり、密すてふにて、こゝのも異なる事はなけれど、なほ此歌

に遣へるさまは、いとかるく、助辞ヤサコトなどいはんが如く聞ゆ。俗言にも、といふといふ言を、いと軽くつかふ事ある類なるべし。たととれど、かくいと軽く遣へていへるも、猶しか(二十三ウ)いふべき所有て、其そへたと、添へざるとは、語勢異なれば、意もまたいさゝかことなるなり。こはすべての詞遣ひに、皆ある事なり。こはまことに、いと大事のことにて、なほざりにすべきにはあらねど、初学のほどには、さばかりのよしでは、及びがたきものなれば、今は、心得やすからん方につきて、一わたり大らかにいひおくなり。委くは、末にいふを見て心得べし。又、詞の証約(フベツ)も、助辞などいふも、まことはいと心ゆかなぬ事にて、おのれ別に難あれども、これは大事長ければ、末にいふべし。しはらく人の耳なれたる筋にて、心得やすかめるにつきて、証約などいふ事、上の集に同じ。な

べには、並に^ナて、これとかれと、ならぶ時にいふ言なりと、横井ノ千秋翁の^{遺稿}いへるが如し。古今^上に「日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける、など皆同じ。四ノ句、ふりてつゝは、詞のさま少しいかにぞや聞ゆ。こはふり出^テての写誤なるべし。六帖にも、ふりいて^トとあればなり。^{但ふり出つゝといふ詞も、なきにはあらず、古今恋二くれなるのふり出つゝなく漢にはたものみこそしるまきりけ。}さて、ふり出^テてにても、ふり出^ツつにても、意は異らず。声をあけて鳴^ク事^ヲいへるなり。古今^夏れ、などは見えたり。」

「思ひ出るときはの山のほと^トぎすからくれなめのふり出^テてぞなく。又鶯によみたるは、蜻蛉日記^上三、「しられねば身をうぐひすのふり出^テて鳴てこそゆけ野にも山にも、など猶あり。一首の意は、梅花の散るにつ^テつて、声をあげて鶯のなくといひて、さは、鶯も、花のちるを^レしみてなくと見ゆ、といふをふくめたるなり。古今^下に「しるしなき音をもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに、などあるをも引合せて思ふべし。三ノ句は、^{四ノ}ふり出^テてといはん料に、春雨のと、枕言のやうにおきて、さて春雨に花のうつろふ事にひどかせたるなり。」

かよひすみ侍ける人の、家の前なる、柳を思ひやりて

(二十四)
みつね

いもがいへのはひ入にたてる青柳に今やなくらん鶯のこゑ

○僻按抄云、はひ入に立るは、門のいり口をよめると聞ゆ云々。鈴屋ノ大人^{古事紀傳、十二ノ}云、後撰集云々。堀川百首にも、「柴の屋の波比理の庭におくか火の煙うるさき夏の夕くれ。是らを思ふに、門より、舎屋ノ内^{ウチ}に入^ルまでの間の庭を、波比入と云しなり。古言なるべし。波比入とは、ただ歩入^{アユミイ}にて、今ノ世の言にも、入^イを、波比流と云これなり。波布とは、いささかの間の処を、歩き行^クことなり。故、源氏物語などに、家内などにて、彼より此所へ来ることなどを、波比渡など多く云り云々。此波比入は、古へ然るべき家にては、大庭と云ヒ、今ノ世には、玄闕

前、白洲シラヌなどいふなる所なれば、云々と、いと委なくいはれたり。これにて明らかなり。猶夫木集三番にも、「見にとくる人だにもなし我宿のはひりの柳下はらへども(二十五)、などいふも見えたれど、此集によみたるやはじめならん。かくて、一首の意は、詞書と合せて見れば、解を待たず。

松のもとに、これかれはべりて、花を見やりて

坂上是則

ふかみどりときはの松のかげにゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

○松のときはなるを、めでたる意のみと聞ゆ。なほ次に、「花の色はちらぬまばかり云々とあるをも、合せて心得べし。かくて一首の意はよく聞ゆれども、花をむげにいひ朽くしたる趣意は、こは、あるまじきにゆゑありげに思はる。此歌、六帖には、松の題に入、家集には、鶯、亭子ノ院の歌合に、「きつゝのみなくうぐひすのふる里はちりにし梅の花にざりける。松、まつのもとに、これかれ侍りて、(二十五)「ふかみどり云々、夏、ほととぎす、「山がつと人はいへども時鳥まつ初声は我のみぞきくと、三首ついでゝさて其前後にも、同じ歌合にとて、多く見えたる中に、絵題と聞ゆる歌、をり／＼見えたれば、此歌も、御屏風の絵などをよまれたるにはあらずか。もし然らば、祝の心などをよくめてよまれたらんも、しりがたし。されど、こはたしかなるよりどころもなければ試にいふのみ。ついでに云、ときはとは、新(トコイハ)の意にて、

(イハホ)の常なるが如く、うごきなく、とこしへなる事、又、とこはと云同あり。そは、万葉巻六に、「梅は実さへ花さへ其実さへ枝に爛れどいや常葉之樹(トコハノキ)、とあるにて、常葉とは、字の如く、常に枯ぬをいふなり。されば、松なども、此常葉の方なるを、やゝ古くより、ときはといひきたれるは、混(マセ)れたるなりと、はやく懸居ノ大人なども、いはれたり。

おなじこゝろをよめる 一本
藤原雅正 惟一本

花の色はちらぬまばかりふるさにとつねには松ものみどり實之集なりけり(二十六)

○此歌、貫之集には、天慶三年、四月、右大将殿御屏風の歌、廿首、人の家にこうばいあり、「紅にいろをばかへて云々、歌下に出た女、柳を見る、「青柳のまゆにこもれる米なれど春のくるにや色まさるらん、ふるさにといたれり、「花のいろは云々とあり。かくては、三ノ句ふるさにといふ事も、よせあり。さて、これにつときたる歌集の歌に、祝の心をふくめられたるがあれば、此歌にもさる心しらひあるべくや。

紅梅の花を見て

みつね

くれなるに色をばかへて梅のはな香ぞこと／＼にほはざりける

○色をば紅にかへつれど、香は白梅に異らずとなり。後拾遺書「うめの花香はこと／＼にほはねどうすくこと／＼そいろはさきけれ。月詣集に、紅梅白梅にほひことならずといふ事をよめる、賀茂ノ成助(二十六)「梅のはないること／＼に見ゆれどもにほひはわかぬ物にぞ有ける、なども見えたり。こと／＼には、別々別々に／＼て、俗に、別々別々にといふに同じ。

これかれまとのめして、酒たうべけるまへに、梅の花に、ゆきのふりかゝりけるを

○まとのめは、下田居下なり。酒たうべは、酒給給にて、即飲むことなり。催馬楽の呂の歌に、酒飲酒飲「さけをたうべて、たべゑうて、とあり。たべを、たうべといふは、音便なり。今の世の俗にも、飲食ともに、うやまふべき人かに對ひていふ時は、給給べ云々といふに同じ。されど、こは飲食する事をいふは、あたらぬ詞なり、もとは、其飲食を、給はることをいひたるよりうつりてのことなるべし。

貫之

ふる雪はかつもけなゝん梅花ちるにまどはずをりてかざゝん(二十七)

○ふる雪は、ふりく、かた片方へより消よかし。さては、梅の花のちるにまがはずして、咲である事をたしかに見て、折てかざゝんとなり。かつといふ詞は、此事をしながら、彼事をもし、或は、此事のあるに、かの事のまじはるやうの所につかふ詞なりと、玉麩に、鈴屋ノ大人の、わきまへられたるが如し。伊勢物語廿二段。又「うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつゝなほぞ恋しき、など皆同じ。けなゝんは、消キエななんなり。消果(キエハテ)よといはんが如し。故レ消(キエ)なんといふとは異なり。こは、な(カ)かとはたらく詞にて、散(チ)し花、入ぬる月などいふ、カぬも同じ。なんは、いはゆる願ひのなんなり。此事は末(キ)にいふべし。

消(カ)のなは、願(カ)の活用(ハタラ)きたるに

兼輔朝臣の、ねやのまへに、紅梅をうゑて侍けるを、みとせばかりの後、花さきなどしけるを、女ども、その枝をゝりて、みすのうちより、これはいかゞと、いひ出して侍ければ(二十七)

※つかね輔云、兼輔ノ朝臣の、ねやのまへに、紅梅を種て侍けるを、みとせばかりの後、花さきける時に、かの家カにまかれりけるに、女どもそのえだを折て、みすのうちより、これはいかゞといひ出して侍ければ、か

此詞書、今くはへたる詞なくは、ことたらぬこゝちす云々

春ごとにさきまざるべき花なればことしをもまだあかずとぞ見る

はじめ、宰相になりて侍けるとしになん。

○なほ昇進あるべき兼輔ノ卿なれば、宰相にても、不足アカズ思ふといふなり。左ノ註にてよく聞えたり。四ノ句、まだは、未イダなり。宰相は、此所にては、参議をさしていへるなり。正明云、大臣以下、参議以上は、宰相なるに、参議をしも宰相とよぶは、宰相を規模とするゆゑなり云々。猶委ユくは、別記にいふべし。

後撰和歌集卷第一新抄(二十八)

後撰集新抄 春中 二 (外題)

後撰和歌集卷第二新抄

春歌中

としおいて後、うめの花木を一本うゑて、あくる年の春、思ふところありて

藤原扶幹朝臣

うゑし時花見んとしもおもはぬにさきちる見ればよはひ老にけり

○老後に植たれば、必^ズ花を待見んとも思はざりしに、今年の春、咲きつ散りつするを見れば、まことに思ひの外にながらへて居たる事よとなり。老と云^フに、年の重なりたる意をふくめたるなり。古今下秋に「うゑし時花まち遠にありし菊うつるふ秋にあはんとや見し、とあるなどの類なり。

ねやの前に、竹のある所にやどり侍りて(二オ)

藤原伊衡朝臣

竹近く夜どこ寝はせじうぐひすのなく声きけば朝いせられず

○よどこ寝は、夜床寝ヨゴトナなり。朝アサいは、朝睡アサネなり。俗には、朝寝アサネといへども、寝ネといふは臥フスことなり。いといふは、

俗に寝入ねいりといふことなり。俗言に寝いといふ事を、物蔭などに、いきたなしとあるにて、心得べし。いもねぬ、いやすくぬるなどのいの詞すべておなじ。されど、此歌の下ノ句も、俗言にいへば、鶯のなく声をきけば、朝寝あそがならぬと云意なり。雅言にてはいといひねといふに、かはりぬ、かはりぬなり。れど、俗言には此かはりぬなればなり。さて、此歌の詞書に、鶯のなく事をいはざるは、歌にゆづりたるなり。古今ここんに、雪の木にふりかゝれるをよめる、と詞書ありて、「春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝に鶯のなくとある類にて、心して書たる物なり。」

やまとの、ふるの山をまかると(二ク)

○まかるとては、通るとてといふ意なり。まかるといふ詞は、もとほ、公(オホヤケ)に出る、公より退く退明をいふなれども、今の京となりての詞には、すべて、京にまれぬなかにまれ、あなたこなたの、尊卑上下にはかゝはらず、あなたへゆくを、まかるといひ、こなたへ来るを、まうでといへる事になりたるなり。これかれの集の詞書にも、物語書などにも、常に多き詞なり。例を考へわたして知べしと、鈴屋ノ大人もいはれたり。さて、それより又うつりて、たと通り過る事をも、かくざまに、まかるといふ事とはなりたるなるべし。されど、山をば、越ゆといふ正しき詞なる。

僧正遍昭

いそのかみふるの山辺の桜花うゑけん時をしる人ぞなき(二オ)

○地名の布留フリュウを、古き意にいひなして、さて、古きといふ山の桜なれば、植けん時を云々となり。大和ノ国山ノ辺ノ郡石上イソノに、布留フリュウノ社のあるによりて地名となり、それより、古き事にも、雨の降ルツルにも、いそのかみふるといひかゝる事になりたるよし、冠辞考などにも見えたり。

花山にて、道俗人々さけたうべけるをりに

○はな山は、此ころ遍昭の居られたる所なり。古今下に、志賀よりかへりける女どもの、花山に入て、藤の花のもとに立よりて、かへりけるに、よみておくりける、僧正遍昭「よそに見て帰らん人に藤の花はひまつはれよ枝はをるともとあるも、此所に居られたればなり。就古今集哀傷に、花山にまかりたりけるに、僧正遍昭の室の跡の桜、ちりけるを見てといふ、詞書も見えたり。道俗は、法師と俗人となり。(二二)

素性法師

山守はいはゞいはなん高さこののをへの桜をりてかざむ

○此山の主遍昭の、とがめばとがめられよ。たとひとがめらるとも、此山の桜を、見てのみは不足アされば、折てかざむとなり。二ノ句は、咎トガめいふことなり。そをたといふとのみいひたるは、下下に「一とせにふたゝびさかぬ花なればうべちることを人はいひけり、又下秋詞書に、菊の花をゝれりとて、人のいひ侍ければとあるなど、皆おなじ。高砂は、地名にはあらず。たゞ山の事なり。高いさの略りたるにて旧説に、山の惣名なりといへる、宜シ。近世に、播磨國の名所とのみ心得る人もあるは、非なり尾ハ猶トシ末ノ也と有ぞ、引合せて見れば、よく心得らるるなり。(三二)されば、尾上と云フは、山の下りたる末より、嶺のあたりまでをいひ、即チ蜂の事にもいへり。

をもしろきさくらををりて、友だちのつかはしたりければ

○此かへし、伊勢なれば、いせがとこそあるべきに、友だちとのみいへるは、例のたがへり。又、おこせといふべきを、つかはしといへるもわろし。すべて、其歌のよみ人の方へ、他カよりおこせるを、つかはしと書ると

ころいとおほかる。こは、他の集にも例はあれど、なほ正しからず。つかはずとは、他へやるをこそいへ、こなたへおこせるを、いかでかさはいはんと、つかね緒に記されたり。

※つかね緒云、友だちにて、伊勢が、おもししろきさくらを折て、おこせたりければ

よみ人しらす (三ウ)

桜花いろはひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

○抄云、桜はいづれもひとしく、かはらぬ枝なれど、形見など思ひて見れば、其人恋しくてなぐさまずとなり。師云、抄の説にて、一わたり聞えはずれど、猶委くいほど、今かくをりておくり給へる、此桜花を見れば、うるはしく、世にすぐれたる色あひ枝つきなれば、君とひとしくならずらへられて、これを君がかたみと思へど、かたみは、その人のかはりに見る物なれど、やがて此枝に、君がことが思ひ出されて、かたみと見るにつけて、心はなぐさまずして、物思ひがせらるゝ事よといへるなり。抄に、いづれもひとしくかはらぬ枝なれどといへるは、くはしからず、形見など思ひて見れば、其人恋しくてなぐさまずといへるは、よろし。(四ウ)

返し

伊勢

見ぬ人のかたみがてらはをらざりき身になずらふる色 六帖ぞらへる花にしあらねば

○抄云、我は形見とてはまゐらせず、我身などになぞらふる花ならねばとなりとあり。此説の如し。猶くはしくいはど、かたみといふ物は、その人を見ぬをり、なずらへて見るに、しばしは心もなぐさむことなれど、此花は、わが身のかたみがてらには、をりて参らせたるにはあらざりし、もとよりわが身などにひとしき花にはサあらねばといへるなりと、師翁いはれたり。

さくらの花をめよる

よみ人しらす

ふく風をならしの山の桜花のどけくぞ見るちらじとおもへば

○契沖法師云、万葉卷十に、「吾瀬子乎莫越山能喚子鳥君喚変瀬夜之不(四ウ)深刀尔。此歌を、拾遺恋三には、第二の句、ならしのをかのといへり。なこしをなだらかに書たるを、後の人、ならしと写なせるなるべし。是によりて思ふに、今の歌も、風をな吹こしそと、いさむる山の名なれば、ちらじと思ふゆゑに、のどかに見るとはよめるなるべし。源ノ義家ノ朝臣の、「吹風をなこそその関と思へどもと、よまれたるに同じかるべし。然るに、これも又、ならしとうつしあやまれるか。ならしの岡も、大和にあれば、ならしの山もあるべきを、風をならずとは、少し心得がたきにや。又万葉七に、「わがせこそこちこせ山とよめるは、大和ノ高市ノ郡巨勢ノ山なり。第三に、「さどれ波いそこせちとつゞけたるも、同所なるに、磯越道と書たれば、こせ山を、なこせの山とつゞけていへるなるべしといはれたり。きはめて此説の如くなるべし。なこしの山は、八雲御抄等にも見えたり。

前裁に、竹の中にさくらのさきたるを見て

坂上是則

桜花けふよく見てんくれ竹の一よのほどにちりもこそすれ

○一首の意、明らかなり。

題しらす

よみ人しらす

さくら花にほふともなく春くればなどかなげきのしげりのみする

○春になれば、桜の花が見事に色よく咲て、桜の花は春になりたるかひあることなれど、わが身は、うき物思ひのありて、桜の花のやうに、花やく心もなく、たゞうき身のなげき事のみしげる事かな。何とて此やうに、物思ひのみする事ぞとなり。なげきといふに、木を（五ウ）かねたる事つねに多し。以下の卷々にも、例多くあるなり。木のしげるも、春の事なれば、かくよめるなり。此歌、伊勢家集には、春物思ひけるにと、詞書あり。

貞観の御時、ゆみのわざつかうまつりけるに

○貞観は、チヤウクワンとよむ。清和天皇の御時の、年号なり。弓のわざは、抄に、融公、近衛づかさなりしころにやといへる。さることなるべし。

河原左大臣

けふ桜しづくに我身いざぬれんかごめにさそふ風のこぬまに

○花の下に弓を射ながら、平にいざぬれん。さやうにぬれなば、風の吹て、花は散たりとも、香は衣にとまるべければとなるべし。香（六オ）ごめは、香よ共にといふ事にて、俗に、香ぐるめにといふ意なり。万葉十七に、「我宿の花桶を花ごめに玉にぞあがぬくまたばくるしみ。下下春に、「根ごめに風のふきもこさなん。又、枕草紙に、むくろごめ、五躰ごめなどいふも見えたり。

家より遠き所にまかる時、前栽の桜の花にゆひつけ侍ける

○抄云、讃岐任国のころにや、左遷の御時などなるべし。

菅原右大臣

さくら花ぬしを忘れぬ物ならばふきこん風にことつてはせよ

○拾遺上巻、ながされ待ける時、家の梅花を見待て、贈太政大臣書「こちふかばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするなとあるに、もはら同じ。(六ツウ)

春のこゝろを

あをやぎの糸よりはへておるはたをいづれの山の鶯かきるいせは六帖

○柳の糸をよりつ延へつするは、鶯の着料に、機を織ると見ゆ。其機をば、何所の山に居る鶯の、来て着ることぞとなり。

花のちるを見て

凡河内躬恒

あひ思はでうつるふ色を見るものを花にしられぬながめするかな物とりながら六帖

○我は、花の上を雨につけ風につけ、やすき心もなく思ふを、花はまた我がかく思ふかとも思はず、心のまゝに散るは、全く我が片思ひといふものなり。然らば、もはやとかく思ふべきはづはなきを、やはりまだ、花にしられもせぬ、心苦をする事かなといふなり。相思ふは、此方の思ふ如く、かなたよりも思ふ事なり。故に、相思はぬといへば、片思ひ(七帖)の事になるなり。万葉卷十に、「相思はであるらんこゆゑ玉の緒の長き春日を思ひくらさく、などあるも同じ。

帰雁をきゝて

よみ人しらず

かへるかり雲路にまどふ声すなり霞ふきとけ春の山風 古来風集抄このめはるかぜ

○霞たる空に、雁の声のおくれさきだちて聞ゆるを、雲路に迷ふと思ひよせたるなり。金葉夏「ほととぎす雲路にまどふ声すなりをやみだにせよ五月雨の空、など似たるいひざまなり。なほ、新古今などにも、似たる歌は見えたり。このめ春風は、木の芽の出るを、芽はるともいへば、木の芽のはるころの春風といふ意なり。されど、歌の意にては、たゞ春風といふのみにて、木芽といふ言は、はるへいひかけん料に、枕詞のやうにおきたるなり。古今又此集に、このめ春雨ともあり。同じつかひざまなり。(七七)

朱雀院のさくらの、おもしろき事と、延光朝臣のかたり侍ければ、見るやうもあらましもをなど、昔を思ひ出
て

大將御息所

さきさかず我になつげそ桜花人づてにやは聞んと思ひし

○此御息所は、延喜の女御なり。今は延喜ノ帝崩御の後の御事と聞ゆ。朱雀ノ院は、累代の後院なれば、帝もおりるさせ給ひて、猶此院に大ましましゝほどならば、我も其桜を見るべき事なれば、かく人伝などに聞んと思ひもかけざりし物をと、昔の思ひ出られて、いたく悲しければ、其桜の咲たりともさかざとも、一向に其やうなるさたなどは、我にはきかする事なかれとなり。さきさかずは格言といはゞサカウがサクク思ひおもはず、ぬれぬれず、ちりちらずなどの類の詞づかひなり。

だいしらず

よみ人しらず

春くれば木葉六帖がくれおほき夕づくよおぼつかなしも花蔭山一本にして

○此歌、万葉卷十に出て、初ノ句、春されば、末ノ句山蔭にしてとあり。ゆふづくよは、夕月夜なり。末ノ句は、万葉にも一本にも、山蔭にしてとある方まさるべし。一首の意は、山蔭にして春くれば木隠れ多きといふ意なり。木のしげりて、月影の障サられがちなるを、おぼつかなくたづたづしとなり。古今集「夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見ぬ。

たちわたる霞のみかは山高み見ゆる桜のいろもひとつはイハウを

○山一面イハに桜の咲つゞき、霞も一面に立わたりてあるを、山が高さに、さやかにはわからずして、皆一色に見ゆるにこそあれ、たゞ立わたりたる霞ぞとばかり、なほざりに見るべき事かはとなり。此末ノ句の文字などは、なるものをといふ意なり。此歌のも、「桜のいろもひとつなる物」といふなり。よりにて、をもしに、一きは力あり、此類よく心して見るべき事なり。

大空におほふばかりのそでもがな春さく花を風にまかせじ

○おほふばかりのは、掩ホカふ程のといふ意なり。さる大きな袖だにあらば、常におほひ隔て、花を風には散らさじとなり。竹川巻に「桜花にほひあまたにちらさじとおほふばかりの袖はありやは、などあるは、此歌によりたるなり。此歌を本歌にとりたる歌、これかれに多く見えたり。(九ま)

やよひのついたちごろに、女につかはしける

なげきさへ春をしろこそわびしけれもゆとは人に見えぬ物から

○諸木こそ春を知て芽の出べき事なれ、人の心のなげきといふは、実の木にあらねば、春とても、異なる事はなきはづなるに、人の目に、かくもゆとは見えぬものながら、やはり我が心中のなげきも、又諸木の如く、もゆる事のわびしさよとなり。されどなげきのもゆるは、目に見えぬ物なれば、かく思ひもゆとも、そなたはしらじといふ事を、ふくめたるなり。木のもゆとは、芽の出る事、なげきのもゆとは、心中に思ひこがれて、胸いたく覚ゆる事なるを、詞の同じければいひよせて、さて木の春を知るといふと、もゆといふとは、同じ事をたがひにいへるなり。(九七)

春雨のふらば思ひのきえもせでいとよなげきのめもやすらむといふ、古歌の心ばへを、女にいひつかはしたりければ

○こゝにふるうたとて、「春雨の云々、此歌は、上下ノ句の間に、いかでといふ事を加へてきく船なり。とあるは、六帖の雨の題に見えたり。

もえわたるなげきは春のさがなれば大かたにこそあはれとも見れ

○春はなべて木ノ芽の出る時なれば、なげきのもゆとのたまふも、春のならひぞと思ふゆゑに、一トとほりにあはれとは思へど、格別なる事とは思ひ侍らずとなり。さがといふ詞は、ならひ、くせ、あたりまへなど、其所にしたがひて訳すべきなり。神代紀にて、性ノ字をサガとよめるはかなふべけれども、サガの詞を、性ノ字とのみ心得ては違ふ事あるなり。古き抄物などに、漢籍、又は日本紀などの文字を引たる事多し。それが中に、まれにはあたれるもありて、一つの心得にはなるべきもあれども、多くはあたりがたくして、みだりなる事も多し。されば、ひたぶるに文字にすがるときは、詞の意を誤る事なり。こは鈴屋ノ大人もいはれ、又縣居ノ大人の、ことはこそ我國のあるじなれ、文字は奴なれば、いかにもつかひてん、といはれたるぞ、まことになま／＼の文字ざたする人の、目さますべ

きことにはありける。

女のもとにつかはしける 藤原師尹朝臣

青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなるすぢに思ひよらまし

○青柳のは、いとよいはん料なり。すぢ、又よらましは、糸の縁語なり。三ノ句、なりゆくかはなり行哉なり。（ナリ）
二ノ句のも文字は、俗言に歌さんには、マアと歌すへきなり、つれなくマアなりゆく事かなといふ語勢なり。 一首の意は甚（ナ）つれなくマアなりゆく事かな。かくては我は、いかやうに思

ひてしのばん、いかやうにも思ひよらん方なく、うらめしき事よとなり。新古今（四）「青柳のいと乱たるこの比はひとすぢにしも思ひよられず。

衛門のみやす所の家、うづまきに侍けるに、その花おもしろかなりとて、をりにつかはしたりければ、きこえ（タ）たりける。

○衛門ノ御息所は、上に、大将ノ御息所とあるにて、三条ノ右大臣ノ女、能子と聞ゆ。御父右大臣、いまだ右衛門ノ督の時、延喜の更衣となり給ひて、衛門ノ更衣とめされ、後に御父の官すゝみ給へるによりて、大将の御息所と聞えしよしなり。太秦は、地名にて、今の都、二条通の西なり。（十一オ）

※ 家のうづまきに侍けるに、その花おもしろかなりとて、内よりをりにつかはしたりけるに、そへて奉るとて聞えさせたりける、衛門の御息所

こは件の如く有べきなり、御息所の歌なれば同書のはじめに其名をいへるは、他人のごと聞えてたがへり、又次の歌御返しとあれば、これはみかどの聞しめし及びて、折にかはしたるに、本のまゝにてはいづこよりとも知がたし、又御かへしによるに、花を折て奉りたるなり、然るに、そへて奉るといふ同なくしては、たゞ此歌ばかりを聞えさせたるごとくなり、又作者を奉る所に其名なければ、此歌も上の藤原師尹朝臣の歌ときこえて、いとまぎらはしと、つかね緒に見えたり。

山里にちりなましかば桜花にはふさかりもしられざらまし

○ちらでありつればこそ、かく花の盛をも、君にしられ奉れとなり。

御かへし

○延喜ノ帝なり。

にはひこき花の香もてぞしられけるうゑて見るらん人の心は

○浅からぬ花の色香にて、植て見る人の心深さもしられたりとなり。上の、「山里に散なましかば云々には、いさゝかうらみ奉らせ給ふ御意もあるを、そはしらせ給はぬさまに、かくこたへさせ給へるにもあるべし。にほひは、花の艶などまで、広くかゝる詞なれば、香とあるに重れるにはあらねど、此御歌にては、香文字は、いとかるく見るべきなり。

小式につかはしける

藤原朝忠朝臣

時しもあれ花のさかりにつられければ思はぬ山に入入ぬべきかなやしなま家集し

○此贈答二首ともに、かたりつたへの誤などあるにや。つたなきさまに聞えて、ときさとす事の難き歌なり。されど試にいはず、春の花盛には、皆人山に入る事なるが、我は君のつれなきによりて、花ゆゑにはあらで、思ひもかけぬ山に入んと思ふと、なるべきかと、師翁いはれたり。山に入といふは、世を遁れて山に入事あれば、其心もありと、横井ノ千秋翁いへりき。

返し

我ために思はぬ山のおとにのみ花さかりゆく春をうらみん^(十二)

○師云、我ゆゑに、思ひがけもなき山に入給はゞ、我は其ことを音に聞て、山の花の盛を恨に思ひて、花盛のある春をのみうらみんとなるべし。春を恨んといふに、其人をうらむる心もこもれりと、千秋翁いへりき。さて、思はぬ某^{十二}といふは、思ひもよらぬ事をいふにて、一つの詞なり。夢浮橋巻、「法の師と尋る道をしるべにて思はぬ山にふみ迷ふかな、なども同じ。

題不知

宮道高風

春の池の玉もにあそぶには鳥のあしのいとなき恋もするかな

○には鳥の足のの、の文字は、足の如くといふ意にて、これまでは、いとなきといはん料の序なり。いとなき恋とは、休息^{ヤウシツク}する間の無きと云フ事なり。には鳥のといふまでを、序と見たる説もあれども、そはひがことなり。^(十二ウ)女^{女の}の^脚事^事などにつきて、自らの足のいとまなきをいふにはあらず。童蒙抄に足のいとなきとは、水鳥の水にあるは安けれども、足をば隙なくかくなりとあるが如く、他より見る目は、さしもしそがはしげにはあらねど、心の中には、苦しき事も悲しきことも、いろ／＼さま／＼に、安きそらなく、いとまのなき恋をもする事かなといふ意なり。^{驚駭(ニホトリ)は、脚に交りて、脚より小さし。是をかいつぷりともいへり。驚駭の聲とはいとことにて、ころ／＼と長く鳴なり}と冠辞考に見ゆ

寛平御時、花のいろ霞にこめて見せずといふ心を、よみて奉れと、おほせられければ

○花の色霞にこめては、古今^{春下}通昭「花のいろは霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風とある歌の事なり。

藤原興風
(十三)

山風の花の香かどふふもとには春の霞ぞほだしなりける

○かどふは、今の人の、かどはすといふに同じく、ぬすみていざなひ行ク事なれば、ぬすむといふにかへてよめりと、縣居ノ大人いはれたり。ほだしは刑具の 桎アシカキカセ、梏アシカキカセの、梏の義なり。古今下維に、「世のうきめ見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれとあるなどに同じ。一首の意は、風が花の香をぬすみいざなひて出んとする、山の麓には、立こめたる霞が、桎カシになりて、心のまゝにはさそひ出がたからん事よとなり。

題しらず

よみ人しらず

春雨の世にふりにたる心にも猶あたらしく花をこそおもへ

○春雨のは、ふりといはん料にて、ふりにたるは、旧フルくなり果ツケたるなり。(今三ウ) ふりにたるのに文字は、いはゆる、(ラハンス)のぬの括用(ハタラキ)たるなれば、たゞふりたるといふとはかはれ

り、ふりたるは、旧フルくなりたるといふに同じく、ふりたるは、古フルくなりたるといふにおなじ。一首の意は、春雨に花のうつろふを見て、我がかくふり果たる心にも、雨にうつろひて、花の旧フルくなるとするをば、惜ツツく思ふ。我は旧フルにたる身にて、花のふりゆかんとするも、同類にならんとするなれば、さしも惜ツツくは思ふまじきさまの事なれど、やはりかれをば惜ツツく思ふといふ意なり。初句、春雨のとあるは、旧フルにたるといはん料ながら、其をりの見る所によしあり。あたらしくは、旧フルにむかへて、新の詞を趣向とせるにはあれども、そは詞のあやのみにて、歌の意にては、たゞ惜ツツむ意のみにいへるなり。此事はよく心得ざれば、混マはし。ブシ。あたとあらたとは詞のとは違ひて、あたは、惜ツツむ意にて、俗言にも、アツタラ物ヂヤなどいふに同じく、あらたは、新の意にて、漢語(カラ)れり。是は兼木田ノ久老主などいへる事なり。然れども上古には、此差別わかりつらめど、中古よりは、一つになりたるさまなるゆゑに、あらたといへることは、歌にも物言書などにも、をく見あたらす、此歌などのも、全く旧と新とを趣向にとり合せたる事明らかにて、集中にも例あり。されば、中古以来の歌をとかんには、歌にらんはかひて、心得べきなり。しひて詞のものみによらんは、又中々の物ぞこなひとなることもあるべし。

京極の御息所におくり侍ける

○此御息所は、本院の贈太政大臣時平ノ公の女にて、妻子と聞えて、宇多ノ天皇に參て、皇子^{ミコ}たちをもうみ給ひたるよしなり。

春霞たちて雲のになりゆくはかりの心のかはるなるべし

○抄云、御息所の、まだ院參もせで、たゞ人にておはしけるころ、契おきし人などの、院參し給ふころよめるなるべし^{十四}。かりの心は、かりそめなる心といふ事にて、かはりゆく事よといふにもあるべしと、師翁いはれたり。猶試にいはゞ、此歌の作者は、もし元良ノ親王にはあらざらんか。下^五に、こといできて後に、京極の御息所につかはしける、「わびぬれば今はた同じなにはなる云々」といふ御歌見えたり。これ同じ御息所におくり給へるなればなり。かく見る時は、はやくより御心を通はしておはせしを、内へ參給ふべきになりたるは、せんかたなきすぢながら、猶うらめしくおぼして、「春霞たちて雲のになりゆくは云々」とはのたまひたるなるべし。二三ノ句のさまざま、げに抄の説の如く、まゐり給はんとするをりの事と聞ゆるなり。さて後にも、猶ひそかにかよはせ給ふ事などありつるが、顯れたるをりに、「わびぬれば今はたおなじ云々」とはのたまひつかはしたるなるべし。^{十五}

題しらず

ねられぬをしひて我ぬる春の夜の夢をうつ^もになすよしもがな

○三ノ句までは、しばらくの間といふ意を、つよくいへるにて、さて、物思ひのしげさに、いもねられぬ意を、ふくめたるなるべし。一首の意は、物思ひのしげくて、物覚ゆるうつゝの間は、苦しくたへがたければ、さるくるしき間は、いとしばしがほどになさまほしとなるべし。

又思ふに、契沖法師云、春の夜の夢は、よくあふよしにあまたよめり。後撰に、「ねられぬをしひてわがぬる云々。又一巻、「まどろまぬかべにも人を見つる哉まさしからなん春のよの夢。新古今に、「春の夜の夢のしるしはつらくとも見しばかりだにあらばたのまん。又「枕だにしらねばいはじ見しまゝに君かたるなよ春のよの夢。又「春の夜(十五)の夢のうき橋とたえて峰にわかるゝ横雲の空。続千載三巻、「あふ事をこよひ／＼とたのめずは中々春の夢は見てまし。貫之集、「ねられぬをしひて寝て見る春の夜の夢のかぎりはこよひなりけり。伊勢集、「春の夜の夢にあへりと見えつれば思ひ絶にし人ぞまたるゝ。兼盛集、「思ひつゝねつれば見えつ春の夜のまさしき夢よむなしからすな。六帖第五、「春の夜の夢はわれこそたのみしか人のうへにて見るがわびしさ。西行法師ノ山家集「としくれぬ春くべしとは思ひねにまさしく見えてかなふ初夢。これらにてしるべしといはれたり。げに拾遺三巻、「いにしへをいかでかとのみ思ふ身にこよひの夢を春になさばや。夫木廿四に「春のよの夢さき川をこぎわたり恋しき人にあふがまさしさなど、なほあるべし。又、書紀崇神の御卷八十に、豊城ノ命(十六)と活目ノ尊と、御兄弟の中、いづかたにか御位を伝へさせ給はんとて、御兄弟のみこの御夢を以て、うらかたとせさせ給へる事の見えたるも、春正月とあれば、春夜の夢によしある事か。もしは此古事などより、春夜の夢をまさ夢なりといふ事は、はじまりたるにもあらんか。そはしりがたけれど、似たる事なれば今試にいふなり。かゝれば、此「ねられぬをしひてわがぬる云々の歌も、恋歌にて、物思ひにいも寝られざるを、しひてねたる春夜の夢に、逢つと見れば、そをやがてうつゝになすよしもがなといふ意ならんか。又は、時世おとろへたる人などの、春夜の夢の中にうれしき世にあへりと見つるを、其まゝうつゝになさまほしきよしにてもあらんか。題しらずとあれば深く考ふべきよしはなけれど、試に驚かし(十六)おくなり。

忍びたりける男のもとに、春、行幸あるべしと聞て、さうぞく一くだりてうじてつかはずとて、さくらいろのし
たがさねにそへて侍ける

○つかね緒云、春、行幸あるべしと聞て、男の許へ装束をおくるなり。行幸はいづこへともなし。然るに、此
詞書のみま、男の家へ行幸有べしといへるやうにて、まぎらはし。されど、古の雅文には、かくさまにいへる
事、常のことなり。男の許に装束をおくるは、供奉の料になりとあり。ひとくだりは、一具なり。てうじて
は、調じてなり。今の俗に、仕立（シタテ）衣服をとよのふる事を、調じてといへる事、此集のころの常の詞にて、物
語書などにも多く見えたり。桜色は、表白オモシロ、裏蘇芳ウラソウのよし花鳥餘情に見ゆ。（十七オ）下襲シタダキは、袖の下にかさぬる衣な
り。

我宿のさくらのいろはうすくとも花のさかりはきてもをらなむ

○花の色は薄くとも、盛のころは、我方に來ても居給へかしといふに、枝を折ユルの詞をかけて、あやとしたるなり。

さて裏の意は、かくまるらする装束の、色あひなどはうるはしからずとも、はななくしき行幸の供奉には、着て給
はれかしといふなり。

忘れ侍にける人の家に、花をこふとて

○此作者の、もとは通ひすまれたるが、今は絶たる女の家に、花をこひに消息するとなり。

兼覽王

年をへて花のたよりにことゝはといとあだなる名をやたちなん（十七ウ）

○古今、あだなりと名にこそたてれなどいひて、花はあだなる物にいひならはしたり。その花の序ツシズに、いまかく

消息せば、契を絶て居て、あだなりといはるようへに、いよく以て、我あだなる名やたゞんとなり。花のたよりは、俗言に、花のついでといふ意なり。六帖、「あぢきなく花のたよりにとはるれば我さへあだになりぬべらなり。重之集、「をさなくぞ春のみとふと思ひける花のたよりに見ゆるなりけりなど、猶多くあり。いとよは、俗言に、弥イミ以てといふに近し。

よぶこ鳥を聞て、となりの家におくり侍ける

○よぶこ鳥は、深山にも里にも、夜にも昼にも、秋冬などにもよみたる歌、万葉よりはじめて、かたゞくに見えたり。縣居ノ大人は、古今打今の俗にかんこ鳥、或はかつほうといふものならん（十八巻）といはれ、契沖法師は、餘材抄に、いと多く古歌をあげて、終つひに、今按に、曾丹が集に、「我身をばみ人すべてすさめぬをあはれにもはたよぶこ鳥かな。源仲正ノ歌に、「あし引の山鳩のみぞすさめける散にし花のしべになる身を。世に年よりこよと鳴々とて、やがてしか名付たり。鳩はげにも然聞ゆれば、昔よりかくはよめり。西行上人ノ歌に、「山ばたのそばのたつ木にあるはとの友よぶ声のすぎき夕暮。和名抄、鳩（夜万八止）、鶺鴒（イハバシ）。此外に、喚子鳥をば出されたれど、野王按、此鳥種類甚多。鳩ハ其惣名也といふをも引たれば、仲正が歌を以て、曾丹が歌に引合せて證するに、彼年よりこよといふはとにや。但かくいへばとて、是なんそれと定めて申にはあらで、見及べることを註（十八巻）しおくばかりなりといはれたり。さて、難波ノ人、入江ノ昌喜といふが、くぼのすさびといふ書に、種々の論をあげて云、もうちどり稲負鳥は、願註密勘、僻按抄等にも、くはしくしるされたれども、呼子鳥には、何の沙汰もなし。定家卿、二鳥を釈して、豈一鳥をもらし給はんや。願昭法橋亦しらざらんや。此よぶこ鳥、其比までは、たれくもよく知たる鳥なれば、註に及ばざるなるべし。されば、人毎によめる歌も多

く見えたり云々とて、右の契沖の説、又三首の歌をも出して云、近きころ、躬恒集の古本を見待した、「声きけば老のまさるに人にくゝ来つゝのみなくよぶこ鳥かなと侍り。またく、かの年よりこと鳴声をさしてよめると聞ゆ云々と見えたり。げに上の歌四首を相照して見れば、かのとしよりことなく鳩をいへるやうには聞ゆるな

(十九)
 り。すべて、かたき事をまつあきらめまほしく思ふも、学者のなべての心なれども、しからは、やすき事どもをば、皆より明らめしめるかこゝろむれば、いとたやすき事どもをだに、いまだえよくもわきまへず、さるものゝ、まじこえて、まづかたきよしをあきらめんとするは、いとあぢきなきなりよく聞えたりと思ひて、心もとゞめぬ事に、思ひの外なるひがこゝろえの多かる物なれば、まづかたきやすきことを、いく度かへきひかむがへ、とひも明らめて、よく聞えん後にこそ、かたきよしをば思ひかくべきわざなれと、鈴屋ノ大人もいはれたり、されど、かたきよしなりとて、むげに思ひもかげずさしきかんも、またくちをしきまわざにはあらん。こは初学のよく心得べきことなれば、今このついでにいふのみなり

春道つらき

我宿の花にな鳴そよぶこ鳥よぶかひ有て君もこなくに

○こなくには、来ぬになり。汝がよぶとて、隣家の人も来ざれば、(十九)さらによぶかひもなし。されば我宿の花になく事なかれと、鳥に令するよしにて、さて隣の人我にうときを、恨ておくりたる意なり。

壬生忠岑が、左近のつがひのをさにて、ふみおこせて侍けるついでに、身をうらみて侍ける返事に

○抄云、左近のつがひのをさと、左近衛の番長といふ事なり。古今、忠岑が長歌に、「てるひかり近きまもの身なりしを、とよみし是なり。身をうらみては、近衛の番長は、大将以下の判授の官にて、卑賤なる身の述懐をいふなるべしといへり。左右近衛所、また、舍人、番長等の事、委しくはまほしけれど、事長ければ、別記にいふを合せて見るべし

きの貫之

ふりぬとていたくなわびそ春雨のたどにやむべき物ならなくに君 六帖(二十)

○いたづらに其まゝにては、決てやみ給ふべきにはあらず。今昇進あるべければ、古きものにして、見すてられた

後撰和歌集卷第二新抄^(二十七)

るやうなる身なりとて、甚しくわび給ふことなかれとなり。春雨のは、ふりぬ、やむべきなどいはん料なり。